

はしだお

ACEF 41th Study Tour.

Japan to Bangladesh via Hong Kong

2011.8.8~8.22



目次

・ メンバー名簿	2 ページ
・ バングラデシュ、ACEF、BDP について	3 ページ
・ ツアー日程	4 ページ
・ バングラデシュ地図	5 ページ
・ メンバー紹介	6 ページ
A、B、C チーム & BDP スタッフ	
・ 活動報告	14 ページ
・ おもしろページ	
食事について	22 ページ
服装について	23 ページ
言葉について	24 ページ
ダウンした人たち	26 ページ
ラマダーン特集	27 ページ
心に残ったメッセージ	28 ページ
・ カラー写真ページ	29 ページ
・ 感想ページ	37 ページ



第41回ACEFスタディツアー参加者名簿

Aチーム(ボクシガンジ地区)

A1	塚本 潤一	TSUKAMOTO Junichi	頌栄保育短大宗教主任
A2	鈴木 法子	SUZUKI Noriko	東洋英和幼稚園教諭
A3	江間 紗綾香	EMA Sayaka	遺愛女子中学高等学校宗教部教諭
A4	入江 里保	IRIE Riho	聖路加看護大学1年
A5	清水 理沙	SHIMIZU Risa	同志社大学神学部2年
A6	松岡 志歩	MATSUOKA Shiho	青山学院女子短大2年
A7	佐藤 葉子	SATO Yoko	共愛学園高校1年
A8	三井 貴恵	MITSUI Kie	山梨英和高校2年
A9	榎本 笙子	ENOMOTO Shoko	横須賀学院高等学校1年
A10	坂田 里英	SAKATA Rie	横須賀学院高等学校2年

Bチーム(ジャマルプール地区)

B1	山口 旬	YAMAGUCHI Jun	横須賀学院小学校教諭
B2	小瀧 秀夫	ODAKI Hideo	新島学園中学高等学校教頭
B3	中谷 泉	NAKAYA Izumi	東奥義塾高校教諭
B4	水内 健太郎	MIZUUCHI Kentaro	青山学院大学3年
B5	大村 美緒	OMURA Mio	国際基督教大学1年
B6	稲垣 沙知子	INAGAKI Sachiko	東洋英和女学院高等部3年
B7	清水 菜央	SHIMIZU Nao	共愛学園高校1年
B8	持田 悠貴	MOCHIDA Yuki	横須賀学院高等学校1年
B9	坂本 いずみ	SAKAMOTO Izumi	横須賀学院高等学校2年
B10	前田 恭子	MAEDA Kyoko	ACEF事務局長

Cチーム(ネトロコナ地区)

C1	天野 海走	AMANO Kaiso	横須賀学院聖書科教諭
C2	山田 久美子	YAMADA Kumiko	共愛学園高校教諭
C3	鈴木 羊子	SUZUKI Yoko	お茶の水女子大学1年
C4	松尾 菜々	MATSUO Nana	国際基督教大学1年
C5	岡山 敦美	OKAYAMA Atsumi	青山学院女子短大1年
C6	伊藤 愛麻	ITO Ema	東洋英和女学院高等部3年
C7	新井 真莉愛	ARAI Maria	共愛学園高校1年
C8	井上 栞里	INOUE Shiori	山梨英和高校2年
C9	飯田 眞生	IIDA Mai	横須賀学院高等学校1年
C10	ダントン みなみ	DANTON Minami	横須賀学院高等学校1年
C11	井上 儀子	INOUE Noriko	ACEF事務局

ACEFとBDPはバングラデシュの基礎教育のために共働しています。

BDP

Basic Development Partners

1990年にSEPとして発足した団体が1999年にBDPと名称を改めNGO登録をしました。

貧しい家庭の子どもと女性を対象に、主に教育、健康、緊急支援などの活動をしています。

今まで学校に行ったことのない子どもや、ドロップアウトしてしばらく学校に行っていなかった子どもも受け入れ、働きながら通える寺子屋学校を開き、一人でも多くの子どもたちに、教育の機会を与えたいと願っています。現在6地域に75校の小学校と、2校の職業訓練校があります。

主な活動

- ① 寺子屋幼稚園
- ② 寺子屋小学校
- ③ 卒業生に奨学金
- ④ 職業訓練校
- ⑤ 保険衛生教育
- ⑥ 文化活動(音楽・舞踊)
- ⑦ 災害緊急支援

活動地域

- ① ダッカ市ミルプール
- ② ガジプール県プーバイル
- ③ ジャマルプール県ジャマルプール
- ④ ボリシャル県カティラ
- ⑤ ジャマルプール県ボクシガンジ
- ⑥ ネットロコナ県ネットロコナ

ACEF

Asia Christian Education Fund

1990年設立。2004年に特定非営利活動法人(NPO法人)の認証。

日本各地の学校、幼稚園、教会、団体、有志などにご協力いただき、バングラデシュに寺子屋(小規模小学校)を贈る運動をしています。

また、アジアの諸問題に積極的に関わる青年が育つことを願って活動しています。

アジアの問題を自分自身の問題として捉えるということは、今ある私たちの生活を「これでよいのか」と問うことにもつながります。私たちがアジアに関わるのは、まず私たち自身が変わられ、日本をアジアを新しい目で見つめ直し、その中で生きるためなのです。

現在、ACEF会員 1,240 名

205 教会

128 幼稚園

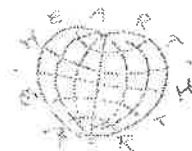
14 小学校

53 中学高校

23 大学

58 友の会

などの団体よりご協力ご支援をいただいています。

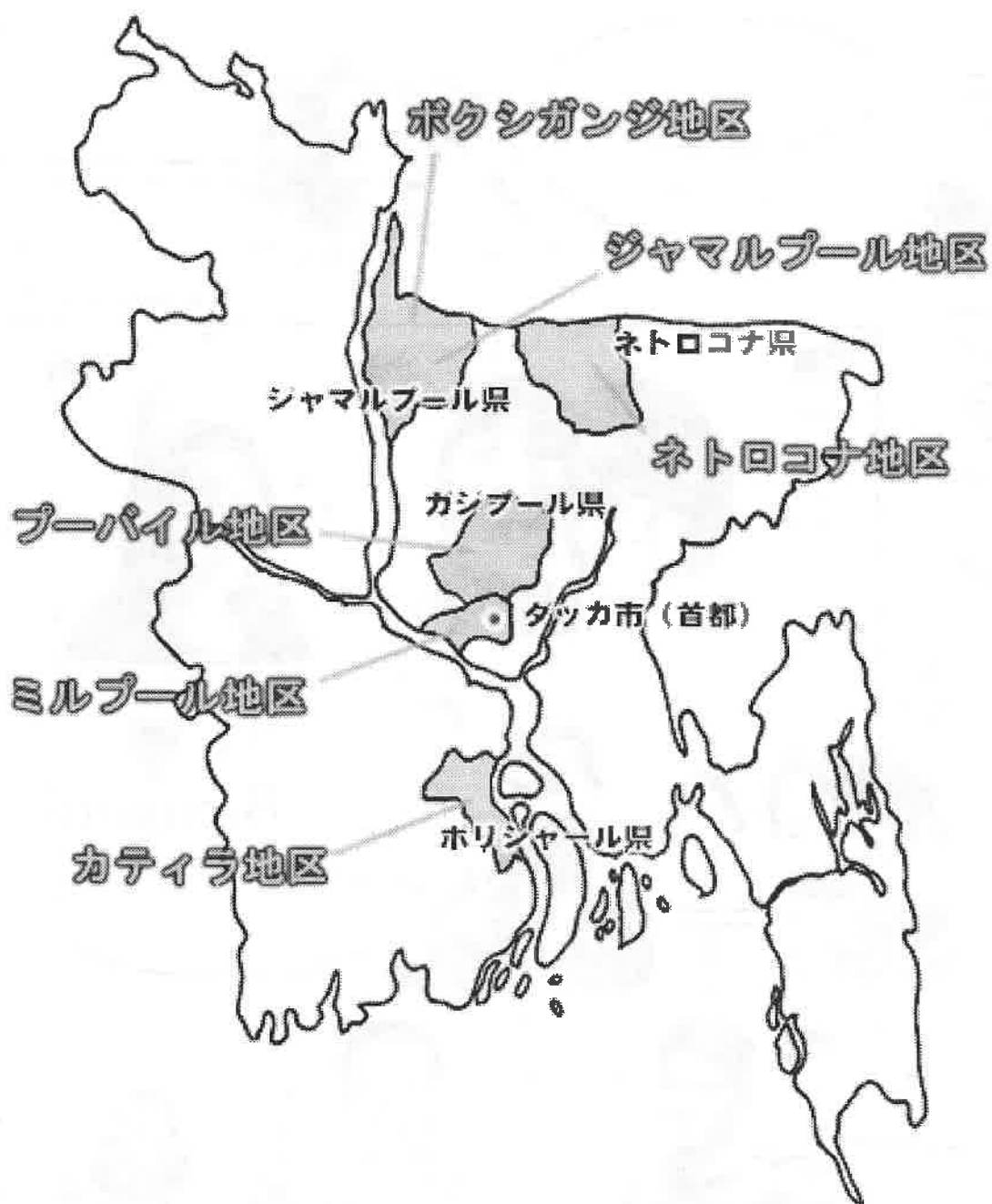


ITINERARY FOR THE 41th ACEF STUDY TOUR GROUP

(From August 08, 2011 to August 21, 2011)

Date	Time	Activities	Persons Involved
08/08/2011 Monday	11:30 PM	Receiving ACEF study tour team at the ZIA International Airport & stay Pubail area office guest house.	Head office & Pubail area office Staff
09/08/2011 Tuesday	7:30 A.M	Breakfast at Pubail area office	Pubail area staffs
	10:30 A.M	Orientation on BDP activity	BDP Head office staff.
	1:00 P.M	Lunch at Pubail area office	Pubail area office staffs
	3:00 P.M	Shopping at Gazipur New Market/ Tongi New Market	Pubail area staff
	7:30 P.M	Dinner at Pubail area Office	Pubail area office staffs
10/08/2011 Wednesday	7:30 A.M	Breakfast at Pubail area office	Pubail area office staffs
	9:30 A.M	Visiting Vocational School at Bhadun	Dico, Prokash, Lochon & A.Faruk
	1:00 P.M	Lunch at Pubail area office	Pubail area office staffs
	4:30 P.M	Sightseeing/Free time	Amol, Rahaj, Lochan
	7:30 P.M	Dinner at Pubail area office	Pubail area office staffs
11/08/2011 Thursday	7:00 A.M	Breakfast at Pubail area office	Pubail area office staffs
	8:30 A.M	Start for countryside: ■ Jamalpur Team ■ Netrokona Team ■ Boxigonj Team	Amrose Hemanta Dico
	3:00 PM	Lunch at Jamalpur Lunch at Netrokona Lunch at Boxigonj	Area staff Area staff Area staff
	7:30 PM	Dinner at Jamalpur, Netrokona and Boxigonj	Area staffs
17/08/2011 Wednesday	7:30 A.M	Breakfast at Jamalpur, Boxigonj and Netrokona	Area staffs of Barisal & Jamalpur
	8:30 AM	Start for Pubail from Jamalpur, Netrokona & Boxigonj.	Corresponding team leaders
	3:00 PM	Lunch at Pubail	Pubail area staffs
	5:30 PM	Free / R & R	Pubail area office staffs
	8:00 P.M	Dinner at Pubail	Pubail area office staffs
18/08/2011 Thursday	7:30 AM	Breakfast at Pubail area office	Pubail area office staffs
	9:00 AM	Visiting Lalkuthi BDP Slum school at Mirpur.	Hemonto, Faruk & Mirpur area staffs
	2:00 PM	Lunch at Pubail area office	Pubail area office staffs
	4:00 PM	Presentation on HIROSHIMA Day to the children of Chamudda School	Mika-san, study tour members and BDP staff
	8:00 PM	Dinner at Pubail area office	Pubail area office staffs
19/08/11 Friday	7:30 AM	Breakfast at Pubail area office	Pubail area office staffs
	9:00 AM	Shopping at AArong	Pubail area staffs
	2:00 PM	Lunch at Pubail area office.	Pubail area office staffs
	5:00 PM	Visiting BDP student's house.	Pubail area staffs
	7:30 PM	Dinner at area office	Pubail area office staffs
20/08/11 Saturday	7:30 AM	Breakfast at Pubail area office	Pubail area Staff
	9:00 AM	Visiting Bhasania school	Area & head office staffs
	11:00 AM	Cultural show by BDP children at Bhasania School Premises.	Hemonto, Dico and Pubail area staffs
	2:00 PM	Lunch at Pubail area office	Pubail Area staff
	5:00 PM	Shopping at Mierbazar/ Free time	Pubail Area staff
	8:00 PM	Dinner at Pubail area office	Pubail area staffs
21/08/11 Sunday	7:00AM	Breakfast at pubail area office	Pubail area office staffs
	8:00 AM	Attending church at Bhadun Church	Amol, Prokas and Luchon
	11:00 AM	Wrap up	Study Tour and BDP Staffs
	1:30 PM	Lunch at Pubail area office	Area Staffs
	3:00 PM	Packing / Prayer / freetime	
	5:00 PM	Start for Airport	Head office staffs

天候などにより一部変更あり。自然には勝てません。



ふあみりーえ一家系図

We



Family A

ホントニイ!

父の双子の弟
でいこ氏



シディボーイ
★ 神さまか
ら Special な
フイブレンセを
与えられて幸
せの施原!

ミナサ〜ン!
ゴハデス!!



ハングオ!
Name カメラマン!
狙ったことものの笑顔は
ずしません



看護師の卵。
一番好きな臓
器は心臓♥



アイス大好き♥
ネット依存

長女
紗綾香

次女 志歩 三女 里保

四女 理沙

We ♥
Boxigonj



おしむ氏

オシュビダナイ♪

聖書の先生や優しく、面談見の良いお姉ちゃん♥いつも早起きデス!



リホ...

オシムの前にはない、オシムの後には道が生まれる!

はしむ氏

イケメンなのに、最初には彼女がいると言っていて、途中から彼女はいないってズルくない?



家宝のだるまさん



ぱるべす氏

ファミリーをこよなく愛するパパ。教育に生涯を捧げ、情熱を注ぎます。



誰よりもみんなのことを考えてくれるパパ、たまにオシッドグ！だけどオシッドグオシッドグ！

母
法子

素敵

♪♪♪♪♪
♪♪♪♪♪
♪♪♪♪♪

Blue Berry FOR BETTER LIFE



平安
二段

誰も気づかないことに育つ
先に気が付く！海をひと目
見ただけで「私たちの船に
着く」その鋭い洞察力が世界
を渡る！

新しい世界に私たちが住
みなければ！ 倅命を救れ
るイケメン＆アニメが恋
おき。

♪相手の口・舌、唇・頬で、ロ
ボスカ〜♪アミリー並肩が
ローソの笑い声に足元は動
きだした。と。

平安三役！鉄腕三役！鉄
人四郎！ミラクル・スーパ
ー高校生！ハイハイガー
ルズ金太郎！等

おいちゃん
哲

We have a problem !
オシエビタ!!!!

張り返れば君がいる！多幸ではないが、**銀狼**のなごみ力で気がつけば重要人物に。愛のひまは決して不滅！

S 子

おばちゃん

僕はタイガー！

さみゆえる氏

小学校のために自分の土地を譲
げた心やさしいジェントルマン。

某内閣に負けないう？ 山口内閣(Bチーム)



首相 やまじゅん: 我がBチームのリーダー！
 ためになる！？お見合い話をみんなに
 話してくれた！(笑) バングラとマンゴー
 を愛してやまない！得意技は
 “無表情”ビーム！



こんな笑顔？



うんちく大臣: もっちゃん
 なおと友にBチーム最年少！そんな彼はちょっと
 オタクで知らない事はないぐらいミスターうんちく！
 バングラでは数々のうんちくを披露していた！



ジュニア大臣: けんだろう
 バングラではなんと子供用フルーツミックス
 ジュースを買った 20歳の学生ww
 一番現地人化していた人物。(笑)



海上大臣: いづみ
 趣味は湘南でのサーフィン
 という湘南娘！長澤まさみに似ている！！
 そしてちょっと天然ww

無表情兄弟



外務大臣: みお
 これまでに数多くの外国に住んでいたと
 いう経験を持つみお！
 国際色豊かなICUの学生！



健康大臣: さっちー どこでも寝られるさっちー！
 たとえバングラのガタガタ道でもお構いなし(笑)。
 バングラの寺子屋の子供達のインタビューに挑戦しました！



侍大臣: 小瀬せんせい
 トレードマークは「侍」の字が入ったシャツです！
 今回のSTで最年長！皆にいろいろな事を
 話してくれました！



通りかかりの
無表情おじさん

お姉さん大臣: なかやん
青森出身の英語の先生!
まさにBチームのお姉さんの存在!
みんなに青森弁を教えてくださいました!



事務大臣: 前田さん 今年の4月からACEFの
NEW事務局長に就任! お母さん的でみんなを
引っ張ってくれました。



活発大臣: なお
Bチーム最年少! 故に一番元気っ子でした。
ダンスが得意でベネチアン人を魅了!!

Jamalpur STAFF



ホビさん:
ちょっと恥ずかしがり屋なホビさん。
優しく笑顔が似合います!!



同一
人物!?



モクレスさん:
「中間管理職」のシャツがお気に入り!
みんなでワイワイするのが大好き!
ジャマルプールのオーガナイザー。



バシエットさん:
素敵な歌声でみんなを魅了!
夜はマジックの達人に変身!
日本語が入ったケロリンシャツ
がお気に入り!

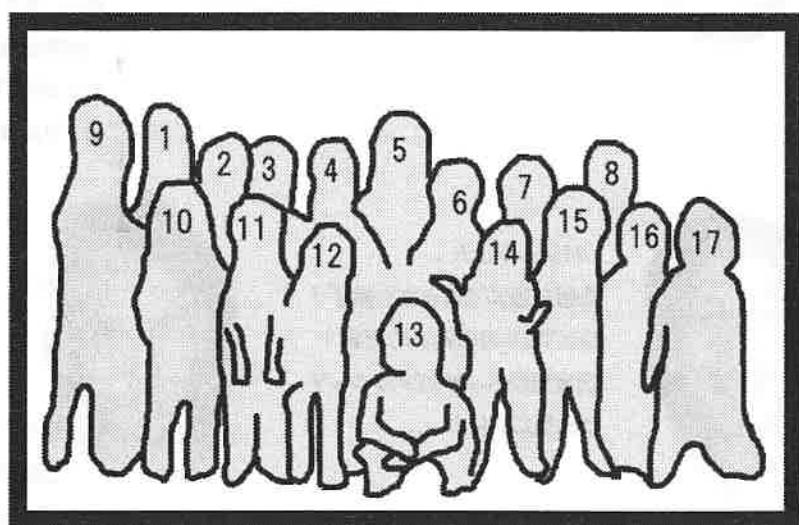


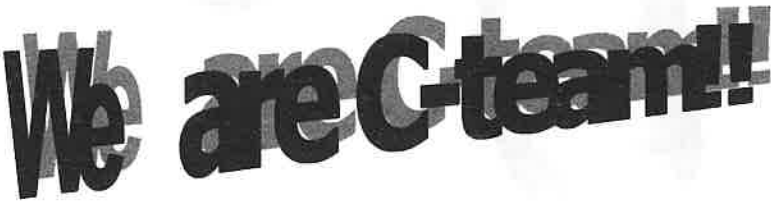
モタレフさん:
ご飯の時、空いたお皿を見つけると、
超大盛りでよそってくれます!!
ジャマルプールのケアワーカー。

自己紹介



8月ダヨ!



① ATSUMI (あっちゃん) かわいい女子大生。親しくなった人だけに見せる変わった一面も……。	② PARBIN (パルビンさん) オフィスでお世話をしてくれた方。とっても洗濯上手。キレイ！	③ YOKO (デビル様) 頭のキレル女子大生。その切れ味は言葉の端々にも出る。	④ ANAROLL (アナロールさん) オフィスでお世話をしてくれた方。ミナさんの夫。キラースマイルの持ち主。
⑤ KAISO (あまたつ) C チームのリーダー。とにかくデカい。寒いギャグが得意？	⑥ HABIB (ハビブさん) ネトロコナのボス。めちゃくちゃいい人。ホントニ？ナニナニ？が口癖。	⑦ SHIORI (しおり) おしとやかな女子高生。でも、子どもたちと遊ぶ時は元気いっぱい。	⑧ HEMANTA (ヘモントさん) BDP スタッフ。釣りと歌をこよなく愛する男。とっても親切。
⑨ MAI (おこめ) ちょっと変わった元気な女子高生。困ったことがあっても勢いで吹飛ばす。	⑩ MINA (ミナさん) オフィスでお世話をしてくれた方。アナロールさんの妻。かわいい！	⑪ KUMIKO (くみこさん) 優しい保健の先生。病気になっても安心。みんなのお世話をしてくれました。	⑫ NANA (ナナ) かわいい女子大生。ちなみに「ナナ」はベンガル語で「おじいちゃん」。
⑬ YASHIN (ヤシンさん) ネトロコナスタッフ。ツアー中に妻の出産予定日を迎え、帰宅。	⑭ MINAMI (みなみ) とにかくパワフル！パイナップルとチャン・グンソクが大好き。	⑮ MARIA (マリア) とにかく声が大きくて、元気がいい女子高生。ディズニー大好き。	⑯ NORIKO (のりこさん) ACEF スタッフ。ベンガル語マスター。ダジャレマスターでもある。
⑰ EMA (エマ) 現地の人と間違えるほどバングラに溶け込んでいた。がんばれ受験生！			

BDP STAFF Dhaka and Pubail



アルバートさん:BDPの大ボス!彼の問いは
とても多くの事を学ばせてくれます。

皆と話すのが大好き!!

時折ジョークを混ぜてきます(笑)。



ヘモントさん:大きなお腹がトレードマーク!
歌の盛り上げには欠かせないムードメーカー。
BDPの教育を担当しています。



ディコさん:BDPのIT担当。ノリノリで歌い
まくり、食器を叩きまくって壊してしまった(笑)。
今回はAチームとボクシガンジへ同行。



オシムさん:今回はAチームのDriverとして
ボクシガンジへ!運転技術はピカイチ!!



アリさん:プーパイルオフィスのケアウオーカー!
チャーターを持ってきたり、食事面では特に
御世話になりました。



アンブロスさん:BDPの総務を担当。今回はBチームと
ジャマルプールへ。優しくて分かりやすい英語でとても話易いです!



ニキルさん:スマイルが似合うニコニコ driver!!
今回はBチームとジャマルプールへ同行。
自らの丸秘体験談も話してくれた!!



オモルさん:ご飯が出来たら「ミナサン ゴハンデース」
と知らせてくれます。プーバイルのオフィス
オーガナイザー。



ラハジさん:プーバイルオフィスの
スーパーバイザー。
会計を担当しています。



ロチョンさん:職業訓練学校のメカニク担当。
30年前のバイクを今も大事に使っています。



ファルークさん:ヒゲが特徴のファルークさん!
BDPスタッフのNO. 2です!!



プロタップさん:BDPの衛生教育を
担当されています。



ブロカッシュさん:プーバイルの職業
訓練学校の機械科の先生。



レンタカーのドライバーさん
BDPスタッフではないけど御世話
になりました。



ソンチョイさん:皆が村から帰ってきてから
最後の4日間に来てくれました。BDPの
財務を担当しています。

パパニング集 ～ Family A



① オシムカー事件 (ボウシガンジーへ向かう途中の大渋滞の中で...)

後ろから来た車が無理矢理割り込んできてオシムカーにぶつかった。
オシムさんが何かを拾った…サイドミラー…(右のミラーがへし折れた)。
車は逃げる、オシムさんが追いかける、デコさんがサングラスを外した。
オシムさんの高度な運転テクニックによって車を追い詰めることに成功。
だがドライバーは一向に謝ろうとしない…キレルオシムさん、キレルデコさん
最終的にチームAのアイドル、オシム & デコに許されドライバーは去っていった。



② HAPPY SURPRISE 事件

ST中に誕生日をおかえた お姉ちゃんとしほっちと
ずいぶん頑張ってくれたパパにドッキリを
しかけましたー♡(´▽`) 内容は…ヒミツ☆



これもある意味 パパニング!?

③ 塚潤 寝言事件 ～ 寝言集 ～

JUNICHI...



A
チ
ム

『ここ、タイのようだけど、バングラデシュだよね。』

メンバー「タ…タイのよう…？タ…？ん…？(困惑)」

『日本に帰ったら、オデッセイを大切にしよう。』

メンバー「オ…オデ…？ねえ…今、オデッセイって言った？(緊急会議)」

『平安二段』→手で2をつくりながら

メンバー「しよーちゃん!!!パパが平安二段見たいって!!(必死)」

※ 全て寝言です☆ 『A チームって最高やな』

＼(^o^)/もっあります。

ワイ!!!



④ オシムカーでの
12時間
ドライブ

ボクシ事情

ボクシのガンジールボクシのガンジール ♪ (' V ') ♪



ボクシガンジールには電気、ガス、シャワー
はありませんでした。

自然とあたたかい人々に囲まれて

Aチームはステキな日々を過ごしました！

ボクシ
☆
スタイル



シャワーのかわりに
大きな 水瓶

小さなオケでくみ上げます！

スタッフの方々が何度も
水を運んでくださいました...！

ありがとうございます♡

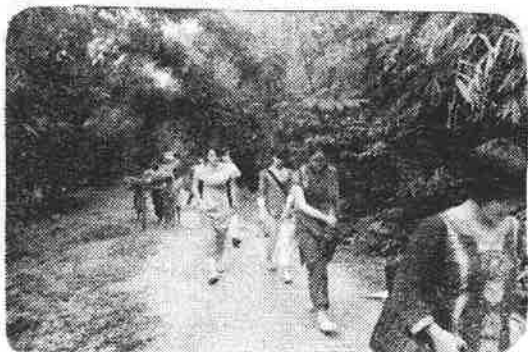
電気のかわりに ろうそく

スタッフの ハシムさんと サムエルさんが
準備をして下さいました！ありがとうございます！
ろうそくを囲んで行灯シェアリングは
とても暖やかな気持ちになれました☆



そして！自然がとっても豊か

移動中？



ただ歩いているだけで

気分爽快 リフレッシュ

まさに自然と共に生きている...
という感じでした。

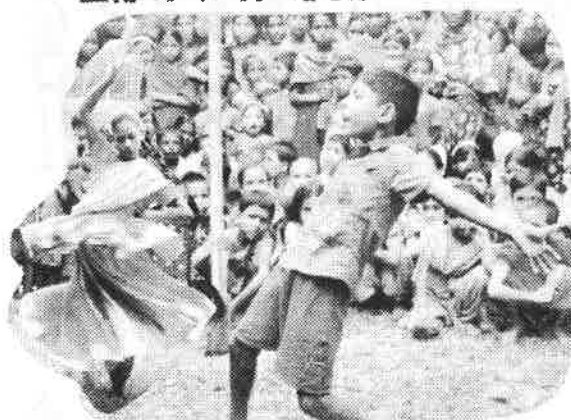
こちらの Heavy Rain は
本当にすごかったです (笑)

★学校訪問★

ボクシガンジ地区にある学校 11 校のうち、
6 校(おいちゃん情報です)訪問しました〜♪
どの学校を訪問しても、
子供たちがとっても可愛い笑顔で
私たちを迎えてくれました。



そして、授業を受けている子供たちは、
目をキラキラ輝かせとっても真剣な表情！
先生が言ったことを大きな声で
一生懸命リピートする姿も印象的です。
一本の鉛筆を大事に使う姿や
宝物のように持つ姿も忘れられません。



私たちも、ヘイハイガールのドレミの歌や
しょーちゃんの空手やいえちゃんの剣玉などの
豊富なネタをえまちゃん先生ディレクターのもと披露し、
子供たちも楽しんでくれたようでした。

川を渡、その
学校訪問も!!
しかし、この後
返ることを
まだ誰も
知らなかった……



最初に訪問した学校のある村は、
村に☆外国人初潜入☆らしく、
村の方々みんなで出迎えてくれました。
もう私たちは芸能人気分♪
ルンルンでした〜♡!

とっても
真剣!!



また、どの学校でも子供たちが
とっても上手な歌やダンスを
披露してくれました。
どの子もみんなシュンド〜ル!!
我々が、鈴木法子先生を虜にしたのが
「偽・マイケルダンス」でした。
これを見た瞬間に一気に
テンションが上がるほどのものでした。



★ボクシタワー(ピクニックタワー)★

めっちゃ気持ちよかったで〜す♪
あっこで寝たら、最高に気持ちいんだろなー



★ガロ族の村にて★

カトリック教会の礼拝に参加させていただきました。
本当に音楽でいっぱい礼拝でとても楽しかったです♪
喉から血がでるんじゃないかという迫力ある賛美が印象的でした！
また、学校訪問もさせていただきました。

この二人はまた... (笑)
新園体中!!
けど、カメラをいならボンドワ〜(w)♡



B チーム活動報告

8月11日（木）

いよいよジャマルプールに出発の日。出発時間は連日の雨で、道の安全が確保できたなら出発ということで、「ベンガルタイム」でしたが、「ベンガル人だから」というより、「私たちのため」に時間が遅くなったとも思えます。途中、人が屋根にまで乗っている汽車、ゴミが道にたまっているマーケット、バンングラデシュ人の無表情ビームと、この国の生活を垣間見れたような気がしました。移動には8時間以上かかりました。

8月12日（金）

今日はイスラム教徒の休日である金曜だったため、学校訪問はありませんでした。タベ遅くの到着で疲れもあり、今朝は7時起床、7時半からラジオ体操、朝拝をしました。気持ちの良い風が吹く中で、田んぼを見ながらのラジオ体操は本当に快適で幸せを感じました。しかし、ラジオ体操をやっている周りで、アムロスさんやモクレスさん、村の子どもたちがじっと私たちを見ていたので、とても恥ずかしかった。

8月13日（土）

今日は初の学校訪問でした。一つ目の学校はほんの少しの訪問にも関わらず、お花や歌、花びらをかけてくれたの歓迎に感動しました。わらで出来た校舎で、下もぐちゃぐちゃの泥の中、一生懸命学んでいる子供たちを見て、勉強することを本当に喜んでいるのだと感じ、日本に帰ったらもっと勉強できることに感謝して、無駄にしないようにすると誓いました。二つ目の学校は、沙知子の学校がお金を出して建て替えたということで、前田さん、沙知子のテープカット＆スピーチがありました。歌やモノマネもしてくれましたが、どれもレベルが高いっ！特にモノマネをしてくれた子は芸達者で、表情豊かに私たちを楽しませてくれました。

8月14日（日）

雨のち晴れのち再び雨。湿気高し。初めての海外ということもあり、やはり体調を崩した。咳が出、声の変化が見られる。もらった薬の影響のせいか、身体にだるさがあらわれて、思考の低下と食欲の低下につながった。本当に辛かった。教会のミサに出席したが、ベンガル語で意味が分からなかった。しかし子どもが元気よく賛美歌を歌い、少しだけカラ元気だが元気がでた。



8月15日（月）

近くのお金持ちの家を訪問し、本当に貧富の差を感じました。私たちがマーケットに行って使う200タカ（日本円で200円くらい）は、今日私たちを乗せてくれたリキシャ運転手の頑張っって一日稼いだ金額かと思うと、自分の欲求のためだけに使うのではなく、誰かのためになる使い道を考えてみるのが、私には必要なんじゃないかなと思いました。お金持ちであることを自慢するので

はなく、BDPスタッフの人たちは高額な給料を貰えるようなチャンスを捨てて、BDPで働き、私たちにも気さくに話しかけてくれる、その生き方はとても素敵だなと思いました。私も誰かのために働くことが出来る大人になりたいと思います。

8月16日（火）

朝の礼拝はイズミール2世（高校生）が、めっちゃ良い話をしてくれて、大学生は困りました（笑）。夜は、みんなでお別れ会の準備。明日でジャマルプールを離れるのは寂しい。時が経つのは早いです。明日は「また会う日まで」と「涙そうそう」を歌うので、泣いたらよろしく！！（笑）

8月17日（水）

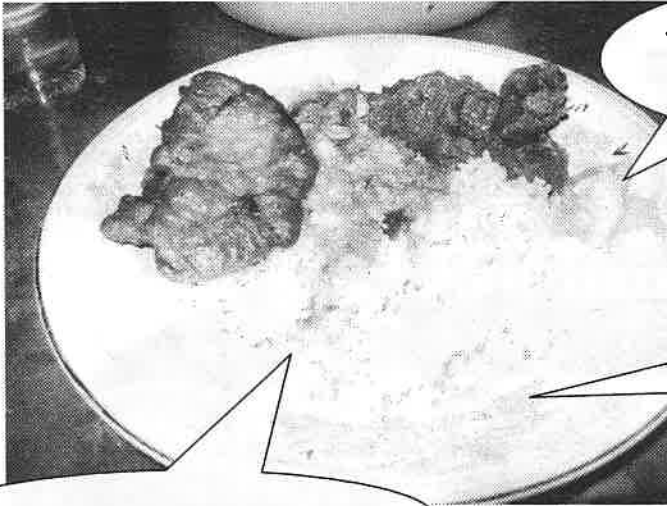
今日はジャマルプールでの最終日。「神共にいまして」を歌って何だか急にさみしくなってきました。この賛美歌は毎年卒業式で歌うのですが、先生の解説を思い出しました。「これから会えなくなる人、一生会えないかもしれないけれども、神様どうかあなたが守り導いてください。」という意味だと説明を受けました。今回のバングラデシュスタディツアーでは本当にたくさんのものを感じさせ、スタッフの方々とも仲良くなれたのでぜひまた来たいと思っているのですが、本当にまた来れるのだろうかという思いもあり、そう思うとこの賛美歌がただの歌ではなく、祈りになりました。





Bangladesh's Food

カレー

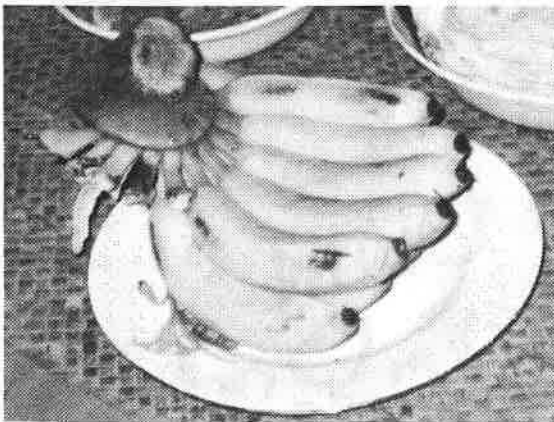


付け合せのきゅうりは、白色!!

アヒルの肉や川で釣ってくれた魚などと一緒に食べました。

Very モジヤ(^o^)/

バングラでは、毎日カレーでした!!
バリエーションもさまざまで少し辛かったけど、
なぜだか飽きず、本当においしかったです (*^_^*)



フルーツ

バナナをはじめマンゴーやパイナップル、パパイヤなどたくさんのフルーツをいただきました。どれも本当においしく、お代わりする人が続出しました \ (°ロ°) (ノロ°) /
特にバナナは、朝食に出たルティーに巻いて食べていました♪

Bengal Fashion



サリー
5メートル以上もある布。
私を着るのは大人のオ・ン・十♡



サロワカニムース
サロワとカニムース
オルオもあわせて
少女時代の完成!



ルンギ
男性用腰巻。筒状の布。
ノーパンが王道!!



ルンギ (短いVer.)
農作業時は短くなる。
カンガルーポケット付。



パンジャビ
丈の長い男性服。
ちょっとフォーマル♫



楽しいベンガル講座～♪

★よく使ったランキング★

- 1位 ドンノバット : ありがとう
 2位 モジャ : おいしい
 3位 オシュビダナイ : 問題ない(現地の人がこれを言うときは“問題あり”な時が結構ある)

《あいさつ編》

- アッサラーム・アライクム : イスラーム教徒のあいさつ
 アライクム・アッサラーム : アッサラーム・アライクムに対するあいさつ
 ノモンカル : ヒンドゥー教徒のあいさつ
 ケモナチェン : お元気ですか
 バロアチ : 元気です
 アパール・デカホベ : またねー
 タタ : ハイバーイ

《会話編》

- ・アマール・ナーム : 私の名前は
 ・アプナール・ナーム・キー?
 あなたの名前は?
 ・エタキー? : これ何?
 ・アショ : おいで
 ・ディン : ください
 ・モジャ : おいしい
 ・ハシ-ダオ : 笑って

《生き物》

- ・ククル : 犬
 ・ゴル : 牛

エク : 1、ドゥイ : 2、ティン : 3

で

ハシダオ～★





でも…
言葉ができなくても遊べるよ！

バン格拉ダウナーランキング！！

ダウンランキング Top3！

一位！ 塚本 潤一先生

高熱でうなされ、キリストが見えたらしい…。

私も見てみたいものです…

二位！ ダントン・南さん

プーバイルに帰って来てからも熱が続き、食事がままならない様子だった。でも、夜遅くまで起き…

三位！ 持田 悠貴（著者）

ジャマルプールでの夜、口を開けたまま寝てしまったため、多分そこからバイキンが入ったのでしょう、次の日から声が死んでました…一日も寝込む始末…クソー!!!

圏外リスト

坂本 いずみさん

ジャマルプールで一日体調を崩した。ニキル car の座席と補助席との間に座っていたため、オシリーヌが爆発したとのこと…オシリーヌが爆発…？何それ…



熱でダウンの3人トリオ

রামজান

Ramadan

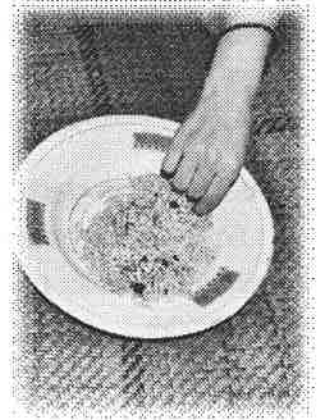
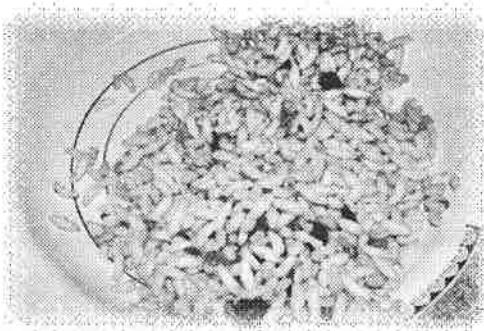
in Bangladesh



ムリ

イフタルのメニューのひとつ。ポン菓子みたいなお米をフライにしたようなものにチャナチュールという辛いお菓子と混ぜたり、甘い砂糖固めたみたいなものが混ざってたりもします。辛いけどモジャ！

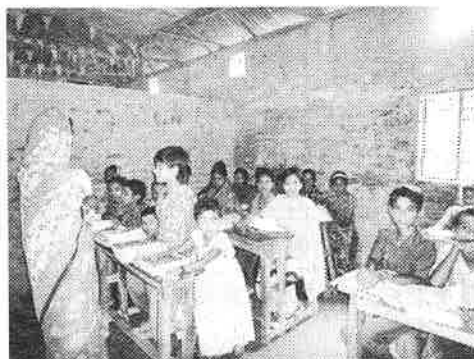
ラマダンとはイスラム暦（太陰暦）の第9月。
毎年日時が変わり、今年は8月2日から31日まででした。
日の出から日の入りまで何も口にすることができません。
つばを飲み込むこともだめだと言う人もいます。
日没後はイフタルという揚げ物の中心の食事をします。



たくさんの方がいたのに日没後に多くの方がご飯を食べに帰ってしまいました。



～心に残ったメッセージ～



●Jamalpur のBDP スクールの先生

ツアーメンバー：「教えている時に何か気をつけていることはありますか？」

先生：「勉強が苦手な子どもたちも授業についていけるように気をつけています。」

バングラデシュの子どもたちは、様々な事情があって、たくさん子どもたちが卒業まで学校に通い続けることができません。BDP スクールの先生方は、それでも子どもたちが楽しく学校で過ごせるように、短い時間でも多くのことを学べる

ように工夫して授業をしていらっしゃると思います。「勉強が苦手な子どもたちも授業についていけるように」という配慮に、先生方のやさしさが感じられたことばでした。

●BDP スタッフのオモルさん

ツアーメンバー：「どうして、BDP で働いているのですか？」

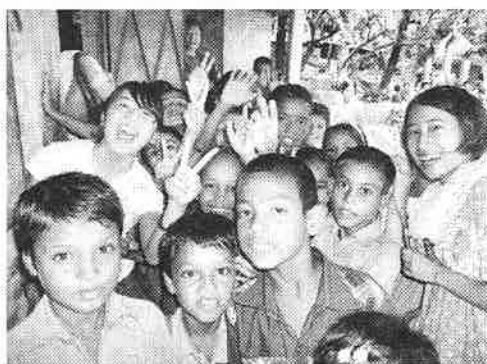
オモルさん：「BDP が大好きだから」

BDP は多くの子どもたちが学校に通うことができるように、すべてのスクールの授業料を無料で行っています。そのため、スタッフのお給料も決していいとは言えません。スタッフの多くは高学歴で、もっと高い給料の仕事につくことも出来ますが、スタッフの方々は子どもたちのために一生懸命働いていらっしゃいます。「BDP が好きだから」という言葉に、「子どもたちのために働くことが好き」という思い、「より多くの子どもたちが学校に行けるようにしたい」という祈りを感じました。

●8月20日夕拝のみことば

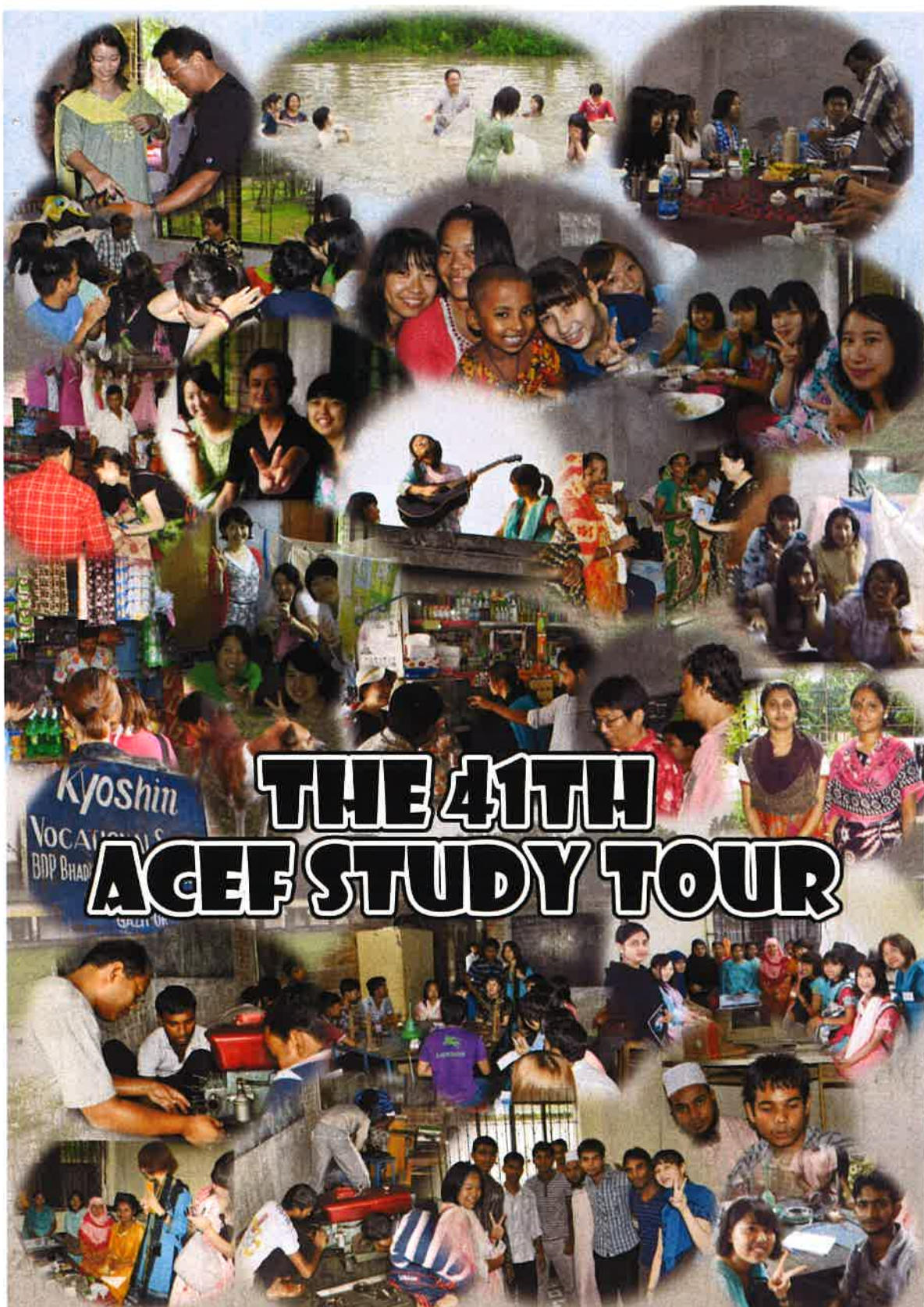
「ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」マタイ 13：8

バングラデシュではたくさんの人々に出会い、支えられ、時間をともにし、メンバーそれぞれが忘れられない経験をしました。しかし、バングラデシュで感じ・考えたことは日本に帰ってきてからも大切です。帰国後自分は何をするのか、このバングラデシュからもらったものをどう活かすのか、バングラデシュで花咲いたメンバーがどのように実を結ぶのか、考えさせられるメッセージでした。



最後にBDPのスタッフから…

「みなさん、バングラデシュを好きになって下さい。そしてまた来て下さい。私たちは待っています。」



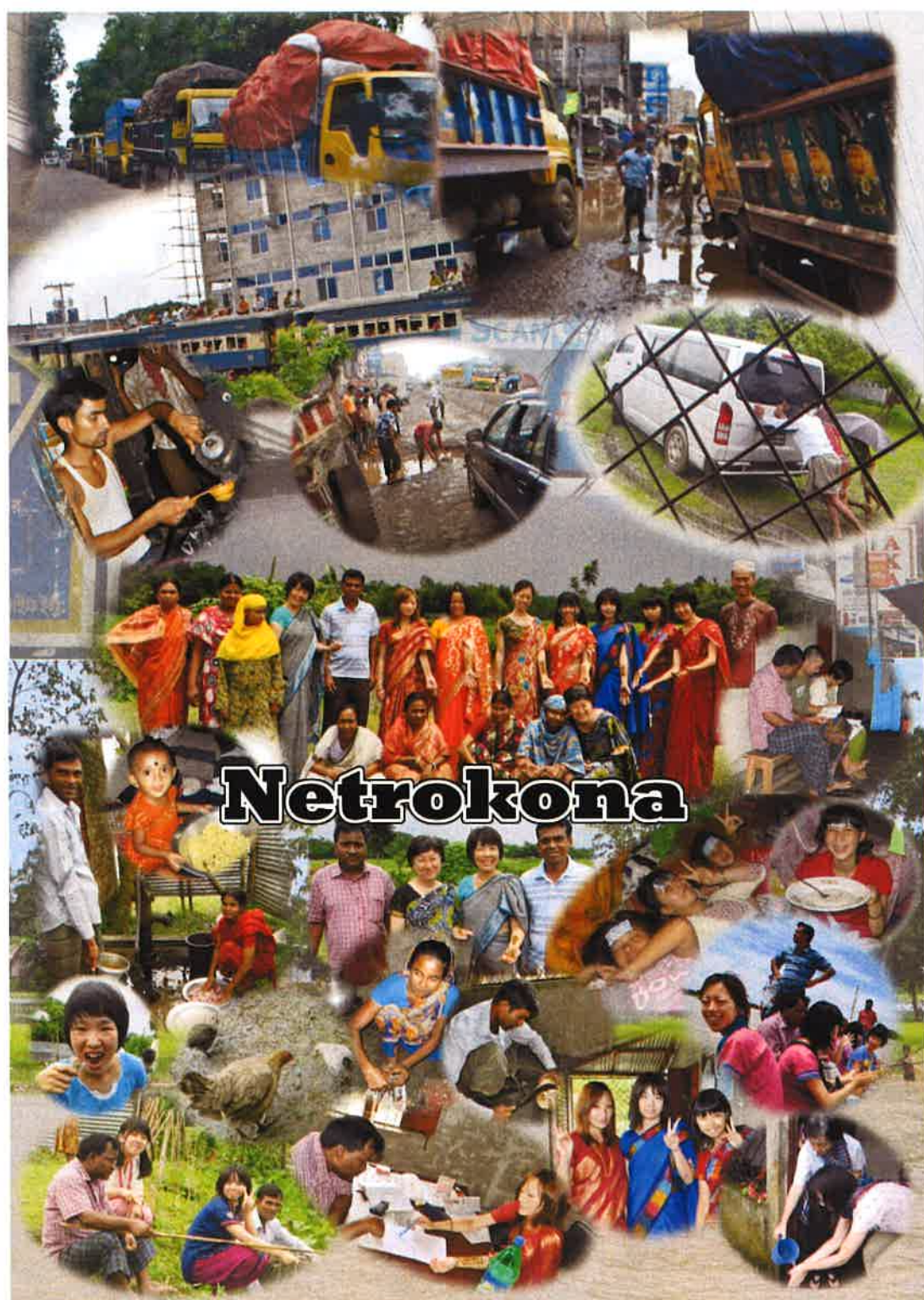
Family A





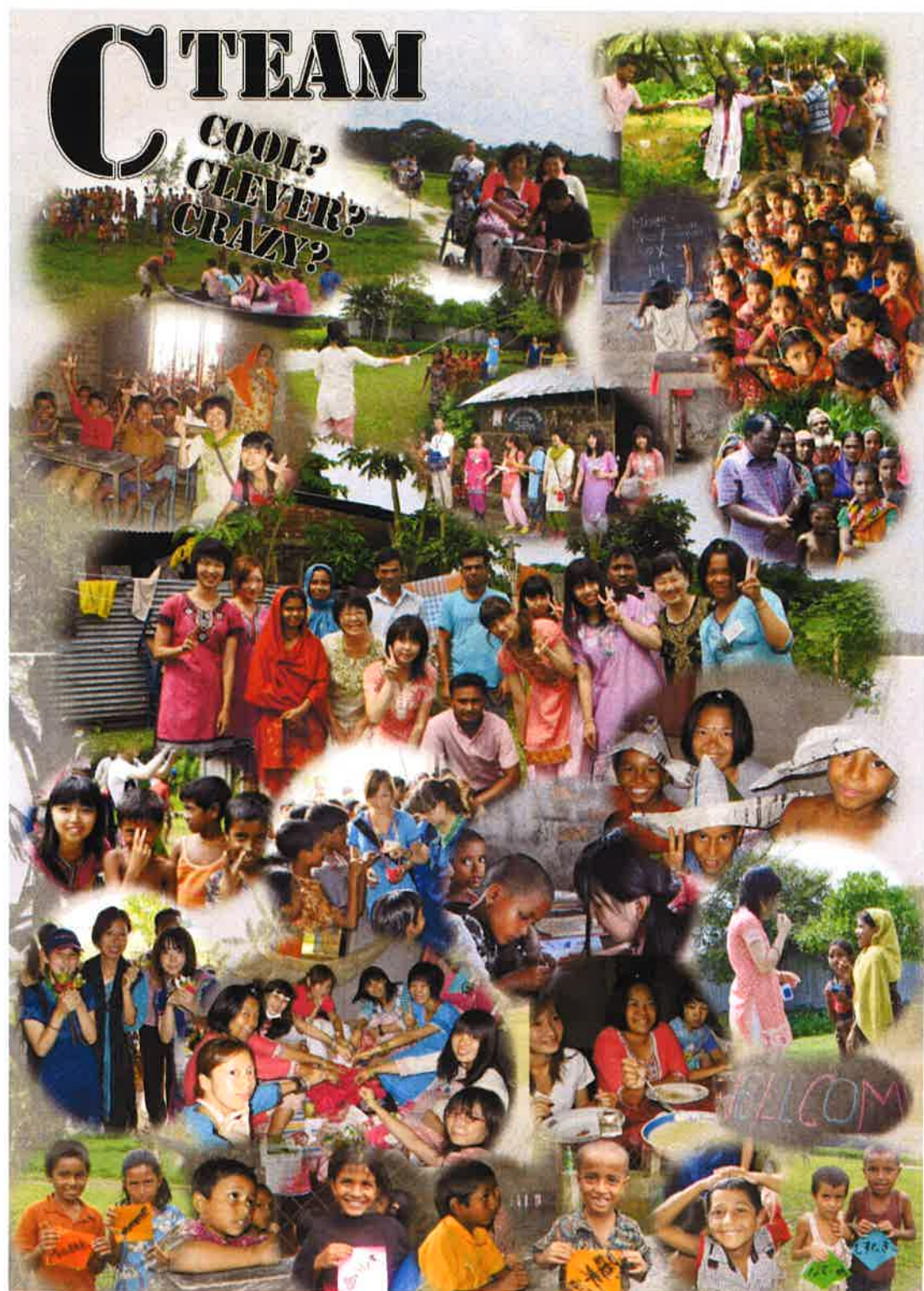






C TEAM

COOL?
CLEVER?
CRAZY?





『あなたはとっても大切』

塚本潤一

総勢 31 名の第 41 回スタディ・ツアーを無事に終え、心からの感謝で一杯です。長雨で道路が崩れたり、大渋滞に巻き込まれたり、体調を崩されたメンバーもおられました。最終的には全員が元気に成田空港に降り立つことができ、嬉しさのあまり踊り出したほどでした。迎えてくださった BDP のメンバーは、どれだけの準備をなさり、どれほど心を砕いて毎日をご一緒してくださったのでしょうか。そのことを思うと、胸が熱くなります。

今回、ボクシガンジという電気のない村で一週間を過ごしました。ろうそくの明かりのもと、エアコンも冷蔵庫もパソコンもない生活。不便で効率は悪い、しかし一人では何もできない、協力しなければ何もできない。だからこそ一人一人に大切な役割が与えられ、それぞれが必要とされているという実感をもって生活されておられるようでした。今の日本ではオール電化で何でも自分でできてしまいます。そのために、どなたかに手伝っていただいたり、協力しないと何もできないという感覚が薄められているのではないのでしょうか。「あなたは私たちにとって、なくてはならない、かけがえのない大切な存在！」というメッセージを肌で実感できる生活、それこそが彼らの「イキイキ」とした姿の源だったように思います。

グラミン銀行系列のグラミン・シャクティ電気会社が 300 ドルのソーラーパネルを割賦で各家庭に提供していることにも感銘を受けました。あの大きさのパネルで一日蓄えることのできる電気量は約 280W。電球一個と携帯の充電と小型テレビで 4 時間分です。太陽の恵みから与えられた 280W を、与えられた範囲の中で大切に使う。エネルギー問題を考えていく上で大きなヒントをいただきました。与えられた恵み以上のものを欲しがったために、楽園が消失してしまった「天地創造」の物語は、今こそ真剣に学ぶべきメッセージであると、電気のない村で考えました。

社会学を学んだ後、小学校のない村のために自分の土地を献げて、少しでもよい地域共同体を作ろうとしているサミュエルさん、40 年間リキシャの運転をして貯めたお金を献げてプーバイルの小学校を寄贈した運転手さん。自分のためではなく、みんなのために！という尊い思いを持った方々の熱い情熱と、献げる潔さに出会えたことも感激でした。また伺いたい！もっとお訪ねしたい！という思いをもって帰ってきました。皆さま、本当にありがとうございました。

祈りとエンパワメント

鈴木 法子（東洋英和幼稚園）

○ 美しい子どもたち

今回、初めてスタディーツアーに参加させていただきました。楽しみにしていた学校訪問では幼児や低学年の授業を見せていただく機会が多くありました。低年齢ゆえ書き取りの授業が多く、子どもたちはノートに、強い筆圧で懸命に文字を書きつけていました。眼差しは真剣で、その姿は美しく、愛らしく、子どもたち一人ひとりに、「立派ね！シュンドール！」と、声をかけてハグしたいほどでした。

そして、目の前にいる褐色の肌の子どもたちの姿から、以前読んだ姜尚中さんの本『母～オモニ』の中に記されていた、姜尚中さんのお母さまのことを思い出しました。お読みになった方も多いことと思いますが、この本には、朝鮮半島から日本にいらした姜尚中さんのお母さまの読み書きができないがゆえに味わった深い悲しみ、そして強く温かな親子の絆の物語が描かれています。

○ BDP の教育実践の意義

スタディーツアーに先立ち、私たちツアーメンバーは準備会でバングラデシュの国情を学びました。識字率は

47.5%とのこと。一方、日本の識字率は99%…なに不自由なく読み書きができていてい社会にいと、読み書き＝識字の大切さを実感することはないのですが、それでも、もしも読み書きができなかったら…と考えてみると、今の生活が成立しないことは想像に難くありません。本を読み内容を理解し味わうことはできないでしょうし、職業選択の幅も限られてしまいます。親として子どもの宿題を見ることもできません。読み書きできる誰かに常に依存し、自分に自信を持てずに、心細く不安に満ちた人生を送ることになるでしょう。

識字教育の願うものとは、単に読み書きができるようになることだけではなく、学習者自身が、自分が置かれている状況や世界を受動的に無批判に受け入れるのではなく、自分と他者との対話を通して、協働し共感し育ち合い、その土地にあった、よりよい共同体や文化を作っていくことにあるのではないのでしょうか。

教育者のパウロ・フレイレは識字教育を通して抑圧されている人々の発達と解放を目指しました。バングラデシュも日本も、直面する課題こそ異なるものの、識字率の高低に関係なく、基礎的な（basic＝BDPのB）識字の教育、さらにはすべての教育を通して、人間の発達（development＝BDPのD）を志向していくことが重要なのではないのでしょうか。BDPのスタッフと女性教師たちのコラボレーションを通して、そのことを日々、バングラデシュの地で行っているBDPの教育実践に深い敬意を表します。

○ ともに祈り合う同労者として

今回のスタディーツアーでは様々な出会いがありました。バングラデシュの子どもたちとの出会い、それぞれの賜物が生かされ輝いていらしたツアーメンバーの方々やリーダーの塚本潤一先生との出会い、様々な心遣いをくださった事務局の前田恭子さんと井上儀子さんとの出会い…そして忘れることの出来ないのは、アルバート・マラカールさんをはじめとするBDPのスタッフの方々との出会いです。

日本とバングラデシュ両国の課題を考える材料を提供して下さる真面目なお顔とジョークが大好きなチャーミングな面を併せもっていらっしゃるアルバートさん、歌と日本語がお上手で自国の教育について深い洞察から熱く語られるヘモントさん、頼りがいのあるオシムさん、賢明でお茶目なディコさん、優しく存在感のあるアムロスさん、細やかな配慮をくださるアンジェラさん、小学校のない村に小学校をと、ご自宅を寄付されたボクシガンジのサムエルさん、そして、温かなお人柄に甘えてお世話になり続けてしまった哲さん…働く国は異なれども、教育という世界のもつ素晴らしさ、奥深さを分かち合える方々と出会い、子どもたちのためにともに祈ることができたことは、私にとって何にも代えがたい貴重な経験になりました。このスタディーツアーに大いにエンパワメントされた今、これからも、この学びの喜びを忘れずにACEFに繋がりに学び、私自身もずっと成長・発達していきたいと願っています。

バングラデシュで学ぶ子どもたち、そしてBDPで、ACEFでお仕事をされるスタッフの方々の尊いお働きの上に、主の祝福が豊かにありますようにお祈りいたします。そして、私の人生に素晴らしい出会いを備えてくださいました神さまに心から感謝いたします。

『いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい。』

(テサロニケの信徒への手紙Ⅰ 5章16～18節)

皆さん、いつも喜んでいますか？

アルバートさんの問いかけを胸に帰国して2週間弱。私は今、幸せや喜びを感じながら生活をしていると言える。もちろん、バングラデシュでの2週間も幸せや喜びに満ちていた。足りないもの、欲しいものを数えればきりが無い。貧困国と比べて自分達は幸せだと思っても意味がない。バングラデシュでみんなと話し合い、いろいろ考えた結果、私に与えられたものをしっかりと見つめ、感謝することが大切だと改めて感じた。それが喜びや幸せにつながるのだ。落ち込むことも悲しみも、私(人間)にとって大事なステップ。いつも喜んでいて人でありたい。

皆さん、絶えず祈っていますか？

山匂さんも言っていたように、スタディーツアーから帰国するたび、祈りに覚える人が増えている。バングラデシュの人々はもちろん、スタディーツアーのメンバーが、神様の祝福と守りのうちに日々歩んでいるように願う。おっと、今年は人だけではなくオシムさんの車も祈りに加わった。祈るといろいろな人(もの?)を思い出し、彼らと今つながっていると感じ、幸せになる。きっと、遠く離れていても喜びや悲しみを祈りの中で分かち合うことができる。そう思いながら今日も祈る。

皆さん、どんなことにも感謝していますか？

今回も神様にたくさんのことを感謝した。特に人との出会いはホントにホントに感謝!!「偶然」という言葉で終わらせてはいけない、神様の備えは私を豊かにさせてくれた。今回のスタディーツアーがより豊かで充実したものになったのは、みんな(特にFamily A)のおかげ。「ありがとう」「ドンノバット」と口にするたび、自分の周りは神様からの贈り物が豊かに与えられていることに気付く。そして「ありがとう」と言葉にすると、みんなが幸せな気持ちになれる。魔法の言葉。どんな時でも、声に出して「ありがとう」と言うように心がけたい。

前回バングラデシュを訪れてから、ずっとこの聖句が私に問いかけている。忙しさを理由にしていれば、喜びも祈りも感謝も私の生活からなくなるだろう。バングラデシュを訪れるたびに思うのは、小さなことでも私にとって喜びとなるもの、感謝するものはたくさんあるし、それが私を支えているということ。これからもこの聖句は、私に問いかけてくるだろう。

ちょっと真面目すぎたかなあ。最後に、帰国後困ったことを1つ。Aチームで流行っていた「ホントに」という彼の口癖。すでにおさまったのでオシュビダ・ナイが、帰国直後は授業中に言いそうになっていた。いや、言っていたかも。さすがに1人では盛り上がらない。寂しさを感じた瞬間。

そしてタイトル。わかる人にはわかるタイトル。そう、「ホントに」の口癖をもつ彼から贈られた言葉。彼が言いたい対象とは違うけれども、確かに私は神様からたくさんの人やものが与えられている。それでいいじゃないか!!

バングラデシュの旅を終え、私は、ふたつの新しいスタートラインに立っていた。自分を知り、認め、生きていくこと、そして、この先の看護の学習や将来への方向性、これらについて、再びゼロから考える機会を与えられたのである…。*****

バングラデシュで、私たちAチームはボクシガンジ地区を訪れた。プーバイルとボクシガンジ間の車移動は、極限状態とも言えるほど過酷な旅であった。車のシートは骨組みに座っているようだし、窓は1箇所しかあかないし！その上クーラーもついていない！しかも大雨の影響で車は大渋滞、道もがたがた。十数時間にも及ぶ長い旅路だった。しかし、この往復の旅で得たものは、1年、いや2・3年くらいの月日をかけて得るものを濃縮したのではないか、と言うくらい価値あるものだった。チームは、過酷な状況だからこそ、助け合ったし、気を紛らわそうと会話もたくさんして、いつしかファミリーに変わったのである。そして気がつけば、自分の過去も現在も飾らずに話すことが出来ていた。私は自分のことを誰かに話せば話すほど、誰かの話を聴けば聴くほど、自分を知ることが出来たし、認めてもらえた時、改めて自分も過去や現在を認めることが出来た。この時、今まで自分を縛ってきたものが、一気にほどかれた気がして、新しい自分が始まった。そういえば、自分の感情のままに号泣したのなんて、数年ぶりだった。今思えば、バングラデシュは本当に本当に不思議な所だ。堅く閉じていた心の扉をこんな簡単に開くなんて…。

また、ボクシガンジにいるとき、料理を作ってくださる女性が指に大怪我を負った。私は救急も少しは学んでいたが、道具がなければ、出来ることは消毒と絆創膏を貼るくらいだった。しかも、ボクシガンジには病院がない。そんな現状を突き付けられた。この時、自分が学んでいる看護がどこでも通用するわけではないことや医療支援の難しさを痛感させられた。しかし、このことで、「将来、国際看護に関われたらいいな」というあいまいな私の気持ちは、「将来自分は、海外で働いているな」という確信に変わったし、日本に帰ったら自分の考えていた看護の枠組みをゼロに戻して、新たに学んで行きたいという想いを持つこととなった。さらに、ボクシガンジの学校で、叫ぶように大きな声で勉強している子供たちを見て、「このこどもたちがバングラデシュを変えていくのだな」というとてつもなく大きな力と教育が持つ力を感じた。私は日本で当たり前のように大学に通い、勉強している。でも、それはスタンダードなことではない。私は、これからペンを持つ度に、あのバングラの子供たちのことを思い出すだろう。教育の持つ意味や力を考えさせられるだろう。そして何より、バングラの子供たちのように、教育を受けられることに、大いなる喜びを感じていられる自分でありたいと思う。*****

最後になるが、私に多くのことを与えてくれたバングラデシュの地、ファミリーA、STメンバー、BDPのスタッフ、ACEF、バングラデシュに関わった全ての方、そして両親に心から感謝したい。ドンノバット！

三年ぶりの大好きな地、バングラデシュ。日本では、なかなか素直に言えない「ありがとう」を自然と心から言える地。今回の二週間もたくさんの「ありがとう」に満ちていた。そして、変わらずにあったものは人間のあたたかさ。日本では、なかなか身近に感じることをできない人間のあたたかさをバングラデシュでは身近に感じる事ができたと思う。そして、なんとなく乾いていた私の心に潤いを与え、気がつくと実家に帰省したときと同じような安心感が私を包んでいた。

バングラデシュは、イスラム教を信仰する方々がほとんどの国。今回のスタディーツアーは、そのイスラム教の大切な五行である断食の期間であるにも関わらず、私たちを歓迎してくれた。ボクシガンジへの移動中やボクシガンジで出会ったムスリムの方々は、とても厳格な印象だった。移動中に車の中の私たち女性に手を振っていた少年をいかにも厳格そうなムスリムのおじさんが力いっぱいたたいた。私はそれを見て、正直怖いと思ってしまった。以前、授業で「イスラム教は、平和を愛する宗教」と聞いたのになぜ…と思った。しかし、私が見たのはこのような面だけではなかった。私が出会った多くのムスリムの方々は、とてもあたたかかった。車が泥にはまり、ただ待つことしかできずに、佇んでいた私たちに「車がはまっちゃったの？大変だねえ。家に来てお茶でも飲みなよ。」とムスリムのおばさんが声をかけてくれた。もちろん、彼女は断食中で、飲み物を口にすることもできない。自分は何も口にすることができないにも関わらず、困っていた私たちに声をかけてくれたのだ。これは、二週間のバングラデシュでの生活のうちの、本当に小さな些細なことである。しかし、私はこの些細なことが強く心に残っている。日本でイスラム教について耳にする情報のほとんどは、正直よい情報とはいえない。だが、実際ムスリムの多くの方々は、ホスピタリティーに満ちていた。そして、人と関わるのに宗教なんて関係ないと思わせてくれた。バングラデシュでは、どの人も自分の宗教に誇りを持ち、互いの宗教をも尊重しているように感じた。また、私はそのおばさんだけでなく、ボクシガンジのサミエルさんやリキシヤの運転手のおじさんの話、出会った多くの人々から、隣人愛を教えてもらい、これからの自分自身の生き方への大切な多くの問いをもらった。

Seize the day.

松岡 志歩

日本に戻って、またいつもの毎日が始まった。コンビニのライトや店の看板、町のあちこちにあるものがピカピカ眩しかった。節電とは言いつつも明るい東京の生活と、ボクシガンジで過ごした電気のない生活。今思い返してみても、あの生活は夢だったのではないかと思うほど全く違うものだった。

オシムカーに揺らり揺られ、座り続けること10時間。だんだん町並みも変わり、日は暮れて辺りはすっかり真っ暗に。ここが最後のバザールでここから先は電気はないです、と言われた時、少しだけこれから先の一週間どうなるんだろうと不安になった。ただ、オシムカーに乗っているとそんな不安は不思議と薄れ、みんなそれぞれここまで来た経緯やこれからのことを、思い思いに語っているのがすごく印象的だった。ボクシガンジでの生活は毎日新鮮でとても刺激的だった。初めは緊張して遠くから見ていた近所の子供たちも、シャボン玉やお絵かきを一緒にするうちに、あっという間に仲良くなった。子供たちがいつの間にか覚えた“バイバイ！”という言葉が今でも耳に残っている。

バングラデシュ最終日、いつものメンバーといつものオシムカーで走った道のりはあっという間だった。相変わらず、車内は暑かったけど、あの暑ささえも今は恋しい。色んな思い出を乗せたオシムカーがダッカ空港に着いて、バスから降りると、急にすごく寂しい気持ちになった。たった二週間しかいなかったバングラデシュなのに、もう何カ月も住んでいたように感じた。空港の中に入るんだ、もうここでお別れなんだ、と思ったら涙が止まらなかった。

バングラデシュという国に来て、現地の状況を肌で感じられた。そして、それに加えて何よりも素敵な人たちに出会えたのが私の今回の旅で大きく得られたものだった。メンディーの取れかけた足を見ながらそんな風にバングラデシュのことを思い出している。

幸せの感覚

共愛学園高等学校 1 年 佐藤葉子

私のバングラデシュのイメージはとても悪かったです。貧しいし、汚いし、服は着ていないし…。日本じゃありえないなと思っていました。日本はバングラデシュより物があふれているし、水や電気は使いたいときに使えるし、日本の方が幸せ！！なんて思っていました。

しかし、実際にバングラデシュに行ってみると、水も使えたり、電気はろうそくやランプでもやっていけたり、全然不便じゃありませんでした。むしろ、日本は水や電気を使いすぎているのではないかと感じてしまうほどでした。

私はバングラデシュに来て、改めて「幸せ」って何だろうと考えさせられました。今までは絶対と言っていいほど、日本の方が豊富だし、お金はあるしお風呂があるし…と思っていました。でも、ただ価値観のちがいで、「幸せ」は決まってしまうのだろうか。2週間、バングラデシュで考えてました。その結果、私なりに、「幸せ」は自分が決めるものであって、他人が決めることではないと思いました。バングラデシュにいても、日本にいても、どちらも幸せを感じとることはできると思います！ だから、これから日本の人々に貧しいイメージを伝えるのではなく、日本と違う文化が楽しめるし、得ることや考えをもち、学ぶことができる国と、プラスのことを伝えていきたいです。

バングラデシュでは、脱水症状になってしまいました。それが一番悔いが残っています。しかし、ACEFのスタッフさん、スタディツアーメンバーの方々に助けていただいたおかげで、私は元気になりました。本当に幸せ者だなと思いました。感謝の気持ちでいっぱいです。脱水症状で行けなかった場所がたくさんあるので、もし、また行ける日があったら行きたいです！！

ありがとうございました。

Family A

三井 貴恵

アルバートさんはスタディーツアーの始めにこの様な問いかけをした。「バングラデシュと日本には52倍の経済格差があります。あなた達は52倍幸せですか？」私はこの研修を通して私なりの1つの答えを見つけた。

私はどちらも幸せなのだと思います。電気が無く、文具がそろわない中でも彼らは輝いていた。私はその姿から幸せを感じとれた。彼らの生きる姿をととても美しいと思った。自分は不幸だと感じる人もいるだろう、でもそれは日本も同じ。比べることなどできなかった。2週間の中で、私が見たら辛い現実と思える中でも、沢山の笑顔と出会った。これは私がまだバングラデシュの一部しか見えていないから言える答えなのかもしれない。しかし、私は、私がバングラデシュでふれた人々より自分のほうが幸せだとは思わなかった。これが問いかけに対する答えだ。たとえ見えていないことがほとんどだとしても、対等だと心から思えたこと、私にとってはそれがとても大切なのだ。今までのわたしは自分のほうが何倍も幸せだと思っていた。どこか上から目線で他人事だった。この答えは私にとって、革命的だった。

この結論に至る過程の中で私に大きな影響を与えたのはチームメンバーとの意見交換だ。幅広い世代が集ったチームは家族のようにあたたかく、1人1人が自分の考えをきちんと持っていた。一日の終わりに行われるシェアリングによって、見えていなかったものがだんだん見えるようになっていった。シェアリングでは全員が率直な意見を共有した。様々な角度から見るそれぞれの景色、年代も立場も違うメンバーの感じ取ったもの全てに影響を受けた。

対等だと、心から思える今、初めて共に生きていることを実感した。友としてアクションを起こしたい。研修を終え、私には一つの大切な夢ができた。これまでは漠然と医療に関わりたと思っていたが、この研修でその想いはさらに進化した。チームメンバーからたくさんの言葉を、意見をいただき、それは様々なことを考えるきっかけとなった。村での滞在中、滞在先の調理をしてくださっている方が指を切ってしまった。あともうすこしで切断してしまいそうな状態だったそうだ。メンバーの早急な対応で応急処置はすんだものの、周りに病院は無かった。彼女は、大丈夫と作業に戻っていった。大丈夫なはずがない。悲惨な医療環境を目の当たりにし、足がすくんでしまった。絶望的な気持ちだった。自立していくために必要な事はたくさんある。私も教育の必要性を強く感じた。でも健康でなければ、生きていなければ意味が無いのだ。生きてなくちゃ授業だって受けられない。笑顔にもなれない。ならば私は自立に向かうためのアクションへとバトンをつなぐお手伝いをしたい。大きな事はできないかもしれない。けれど私はあらためて決心する。医療に関わる方面に進みたい。国境を越えて医療に携わりたい。友の笑顔を見続けるために！

ACEFの方々、BDPのスタッフの方々、現地の方々、一緒にツアーに参加したメンバーのみなさん、本当に！本当に！ありがとうございました！！みなさんに出会えたことをとても幸せに思います。

「生活の質が五十二倍違えば、幸福の質も五十二倍違う事になるのだろうか？」
アルバートさんは、わたし達にそう問いかけます。バングラデシュ滞在中の、二日目の事でした。

その質問を聞いた時に、まず、わたしは「生活の質」という言葉が何の事を指しているのかがよく解りませんでした。だから、自分の中で勝手に「生活の質」を「便利さ」という言葉に置き換えてから、度々、その問いについて考えてきました。

幸せの捉え方なんてものは人それぞれでしょう。だけれども、日本とは何もかもが違う環境であるバングラデシュで二週間を過ごして、足りない頭を振り絞って、考えて考えて考えた結果、質問の答えにはなっていないものの、自分の確信を持った考えが、一つだけ出来ました。

それは、「便利」と「幸福」は、全くの別物だという事です。

「生活が便利」だからといって、それが「幸福」とは限らないし、「生活が便利ではない」事が、「不幸」だとも限らない。「便利」「不便」は「幸福」「不幸」の原因には成り得るのですが、決して、イコールで結ばれる関係では無いのだと、そう考えつきました。

それくらい何も今更言う事でも無いだろう、そう思う方もいらっしゃるでしょう。ですが、バングラデシュに行って、アルバートさんの問いかけの意味を考えるまでは、「便利」と「幸福」を同一視していたわたしにとって、この事は、ようやくと見つけた大発見なのです。

もしも「便利」と「幸福」が同じなのならば、このスタディーツアー、ものが満ち溢れた快適な暮らしを標準としている日本と比べて、電気さえもまともに使う事の出来ないバングラデシュの生活は、あまり幸せではないものとして記憶に残るはずでしょう。けれども。

わたしがバングラデシュで過ごした二週間は、日本で過ごす二週間よりも、幸せでした。

それが何よりの証明じゃないかなと、わたしは勝手に思っています。

最後に。わたしがバングラデシュに行く事を快諾してくれたお父さん、お母さん。わたし達をいつでも心優しく支えて下さった、BDP スタッフの皆様。わたし達の学校訪問をあたたく歓迎して下さい、バングラデシュの皆様。思いやりと助け合いの精神を教えて下さった、スタディーツアーメンバーの皆様。そして、素敵で無敵な FamilyA ありとあらゆる出会いに心からの感謝を捧げて、この文章を締めさせて頂きたいと思ひます。

バングラに行って

横須賀学院高校 坂田里英

私はバングラデシュに行く前は、衛生状態が悪くて、治安も良くなく、マラリアなどの感染症にかかりやすいと思っていました。それに電気や水道が十分でなく、とても暮らしにくい国だと思っていました。だから今まではバングラデシュのような発展途上の国には行きたいとは一度も思ったことがありませんでした。

しかし、3月に日本では大きな地震がありました。原発の事故などで電気の使用量が制限され、とても不便に感じていました。そこで初めて、電気などがあまり普及していないバングラデシュなどの国ではどのように生活しているのかと気になり、今回のスタディツアーに参加を決めました。参加を決めてからも、感染症など、いろいろなことが不安でした。

実際にバングラデシュへ行って、現地の人や同じグループの人と話したり、一緒に行動したりしているうちに、自分がバングラデシュに行く前に思っていたことと真逆のことを思うようになりました。確かに日本に比べたら不便かもしれないけれど、その分、人と人がお互いを助け合うことによって不便とは感じずに生活できました。日本だったら全部がそろっているから、わざわざ助け合う必要はありません。だから人とのコミュニケーションも減り、携帯やパソコンを相手に生活しているような気がします。

改めて人との関わりは大切だと思いました。普段何気なく接している家族や友達との関わりをこれからは今以上に大切にしたいと思いました。

ありがとうございました。

うちは当たり前じゃない！

山口 旬

今年のバングラの 8 月はとにかく雨、雨、雨。雨が降るとこれだけ生活に影響するとは思わなんだ。雨で渋滞するのは日本も同じだが、道路状態がこんなに悪いのは想像以上だった。

かつて 2003 年の夏のスタディツアーは出発三日前になって突然ツアー中止のメールが届き呆然とした。理由は大洪水で空港からプーバイルまでもままならん、食事等衛生面も保証できないから中止やむなしとのこと。

2006 年の夏のツアーは各地で増水のために、農村へ向かう道路が冠水、移動できないからプーバイルに 2 週間滞在という稀有なプログラム。

天災はどうにもならんというのはここに来るとよくわかる。ダッカに行けなかったスラムを見られなかった村で交流したかったアーロンで買い物できなかった。残念だけどしかたがない。これも雨季のバングラである。

加えて今年はラマダンにモロぶつかった。ここ数年はラマダンの最中の S T になることは避けられない。

そんな通常の S T でさえあまりない非日常な活動だったが、気がつくとその「当たり前」の生活になっていることに気付く。食事は手でいただく、これ当たり前。トイレは左手を使う、これ当たり前。蚊帳の中で寝る、これ当たり前。雨で外に出られない、これ当たり前。雨で到着が遅れる当たり前。停電当たり前。エアコンない当たり前。(いや、ニキルカーにはエアコンがあった。こんな糞沢信じられない)

今回のツアーで幾度となく語られた言葉、「当たり前」ってなんだろう。

非日常の当たり前でない環境に飛び込むと、今まで当たり前だと思っていた生活が当たり前でないことに気付く。これこそ S T の真骨頂。自分の生き方を見つめ直すには、一度枠を飛び出して自分の世界を外から見直すのが一番だ。

わが職場の同僚「トイレ紙なし手で始末？ ブルブルまっぴらゴメンです」「40 回カレー？ 御免被ります」「衛生面しんぱーい。私パス」「マラリアになったらどーするの」「絶対ムリ！」

でも世界 70 億の人類の過半数はそういう生活をしているんですぜ。世界の富の 8 割を我ら 2 割の民が独占してるんですぜ。うちらが特別なんですぜ。自分たちこそがスタンダードなんてとんでもない。だからこそ我らはどういうふうに生きていくべきかを考えなければならんのです。この 2 週間、テレビなしエアコンなしコンビニなしメールなし。(あ、メールはしてたか。携帯社会と化したバングラ、侮るべからず。) でも不便は感じない。ないのが当たり前なら不満もない。だからよくよく考えればこれらは無くてもいいものなのだ。震災で節電モードになっている我らは最近ようやく使いすぎ便利すぎに気付いた。不必要に便利になっている日本に暮らすわれわれはこれ以上便利になる必要はないし、なってはいけない。これ以上何を求める？ 携帯やら I T やら、これ以上どう便利になる？ 人として大切にすもの、もっと大事なものがあるだろう。物質ではないなにかが。それは心配する相手。それは想像力。その他目に見えない何か。バングラに来るたび、思うことでした。

ACEF バングラデシュ・スタディーツアー報告書

～関係者すべての皆さまに、ドンノバット～

新島学園中学校・高等学校

教頭 小瀧秀夫

スタディーツアーから戻って10日余り、日本での通常の生活に戻りつつある今日この頃です。日常業務に追われてバタバタと動き回っているその時、或いは朝早く目覚めてボーッとしているその瞬間、どこからともなく「エイ ポッダー エイ メグレナー ♪」のメロディーが湧き出すように流れてきます。またある時は「ドヤル ババ ケヤル カバ アイナル カリゴル ♪♪」と地響きをたてて、歌い踊るBDPのスタッフや現地の人々、そしてスタディーツアーのメンバーの姿が蘇ってきます。そして次の瞬間、「ああっ、ここは日本なんだ、バングラデシュではないんだ、と我に返ります。

私のこのスタディーツアー参加の理由は偶発的なものでありまして、本来は私の勤務する新島学園中学校・高等学校の宗教部長である小栗先生が参加の予定でありました。しかしながら小栗先生が出発の約1ヶ月前に、心膜炎という病気を発症し緊急入院、棚からぼた餅のように私が代理参加となったわけであります。他のメンバーのように、自ら希望し、しっかりと準備をされて参加された方々には失礼千万なメンバーでありました。

しかしながら、今振り返ってみて、このスタディーツアーは私の人生においても一、二を争うエポック・メイキングな出来事となりました。同僚の小栗先生のご病気に感謝しなければなりません。失礼、もう本人は元気ですので、ご安心ください。(笑い)

私の準備不足は否めませんが、ツアーリーダーの塚本潤一先生、チームリーダーの山口旬先生や天野海走先生といった経験豊富な先生方に恵まれ、また、引きこもりやすく、徘徊傾向のある私を温かく見守り、親切に接して頂いたBチームの皆さんの優しさに助けられ、貴重でかけがえのない二週間を過ごすことが出来ました。

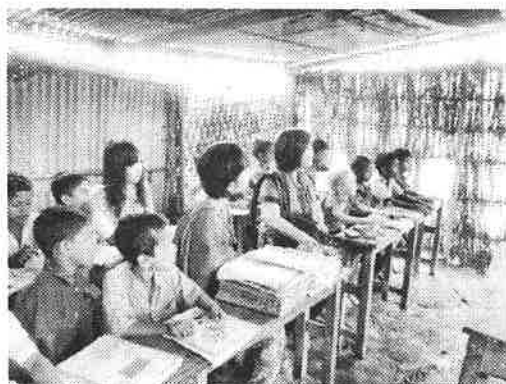
プーバイルやジャマルプール、ボクシガンジで訪問した寺子屋小学校で出会った子どもたちは皆生き生きとしており、失礼ながら、掘っ立て小屋のような小学校の裸足の子どもたちが、目をキラキラさせて真剣にベンガル語や算数の勉強に取り組む姿には言葉にならない感動を覚えました。不十分な教材や彼らの置かれている生活環境のことを思うと、もっと良い校舎を、広い運動場や新しい教材を、と思わずにはいられません。また私のそのような軽薄な思いと同時に、これまでのACEFとBDPの20年余に及ぶ、地道な協働作業の重さと尊さに感激しました。あらためまして関係者の皆様に敬意を表し、感動と感謝を与えて頂いたことに心より感謝申し上げます。

バングラデシュでの生活には驚きや新発見が満ち満ちていました。トイレや食事、水浴びにしても、普段の日本での生活に比べれば不便なはずなのに、不便とは感じず、むしろ新鮮な感覚で受け入れることが出来ました。やはり、その土地に合った作法や暮らし方があってしかるべきで、日本での快適な暮らしが決して当たり前でなく、それらが良い作法や暮らし方なのかどうか、あらためて考えさせられました。そんな気持ちにさせてくれたのは、バングラデシュの美しい自然と純粹で、200%のおもてなしの心で私たちを迎え入れてくれたBDPのスタッフやバングラデシュの人々のお陰と思っています。

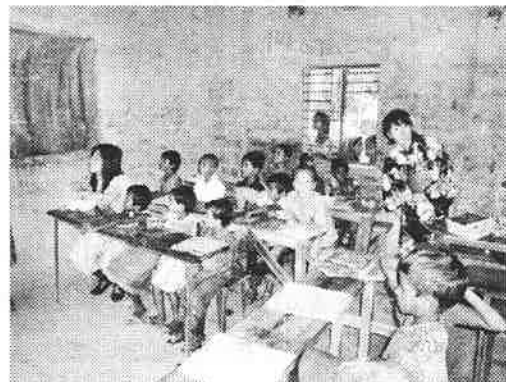
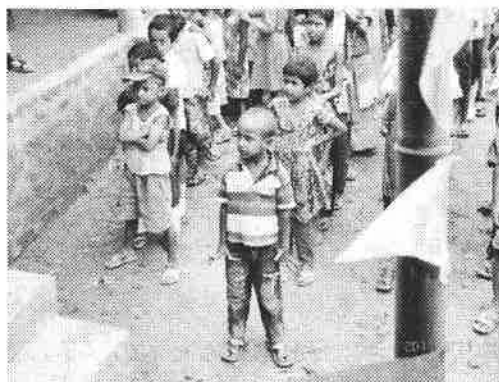
私はジャマルプールの村で約一週間過ごさせていただきました。ジャマルプールの景色は、50年前の私の故郷（群馬県の農山村）の景色に似ていました。ジャマルのBDP事務所前の道である日の夕方、私は忘れられない光景に出会いました。夕飯のおかずと思われる一匹のイリッシュ（バングラデシュの国民魚）とジャックフルーツをぶら下げてトボトボと家路に向かうかわいい少年の姿を見かけました。おそらくバザールまで買い物に行かれた帰り道だったのでしょう。私の幼少期の原風景を見ているようでした。

寺子屋小学校で不十分な教育環境の中で目をキラキラさせて勉強している子供たち、また決して裕福とは言えない境遇でありながら、私たちを精一杯もてなして下さったBDPスタッフや村の人々、喧騒と混沌のバザールで逞しく生きるバングラデシュの人々に、日本がこの50年で豊かさと引き替えに忘れてしまった大切なもの見たような気がしました。

最後になりますが、ACEFの関係者の皆様、とりわけ同行して大変お世話になりました事務局長の前田恭子さんと井上儀子さん、現地BDPスタッフ全ての皆様、最高のおもてなしで迎え入れてくれた寺子屋小学校の子供たちや先生方、関係者の皆様、そしてご一緒した第41回ACEFスタディーツアー参加メンバー全ての皆様に、無限大の感謝を込めて、ドンノバット[∞]



掘っ立て小屋のような寺子屋小学校で真剣に教え、学ぶ先生や生徒たちに教育の原点を見るような気がしました。



この子供たちが安心して学校で学び、子供らしく生活できるよう、これからもACEFとBDPの尊い協働に微力ながら支援させていただこうと思っています。

旅を通して感じた一番大きなこと。それは、「人の暖かさがこんなに心を満たすだなんて！」ということです。今まで抱えていた虚しさの原因はこれか、と気付かされた2週間でした。

私はここ数年、なにか虚しさを抱えていました。それでもこの虚しさはどこからくるのかを考えることなく、ただがむしやりに前に進んできました。生徒の学力偏差値を上げよう、進学先をできるだけ名のある大学にしよう、そればかりに気を取られて、毎日を過ごす日々でした。思えば授業準備に追われ、生徒との会話も少なかったし、話すとしても用件以外あまり話さなかったし、授業も先に進むことしか考えていませんでした。そんな生活で、心が満たされるはずないですよ。私は生徒との触れ合いに飢えていたんだな、と今更ながら気付きました。人は人と触れ合って初めて満たされる。それに気付かせてもらって、本当に感謝しています。

バングラの人の私たちへの心配りは細やかでした。お金を出してもらっているから、とか、そういう理由もあるのかもしれないけれど、それ以上の暖かさを感じました。特に今回はラマダンの時期で、ムスリムの方たちは断食をしていたのです。そんな中、私たちを色々もてなしてくれる心遣いには頭が下がる思いでした。空腹の中で自分は食べない「ごちそう」を作ってくれた女性たち。空腹にも関わらず、私たちを様々な場所に案内したり、歌を歌ってくれたバッシュさん。私は空腹だったり疲れていると、すぐに不機嫌になってイライラしてしまう傾向があるのですが、そんな自分が恥ずかしくなるほど、彼らは思いやりにあふれていました。私たちをもてなすためには断食などしていただけないと宗教の戒律を破ってしまったモクレスさんのことも忘れられません。破らせてしまったこと、ほんとに申し訳なく思っています。でもその心遣いがすごく嬉しかったです。

バングラでの2週間は本当に幸せでした。何もかもが「ドンノバット」でした。バングラで人の暖かさに触れれば触れるほど、ここにいたいという思いが強まりました。そして不思議なことに、逆に早く日本に帰って、周囲の人たちにこの暖かさを与えてあげたいと思う自分もいました。日本にいる家族や友だち、生徒たちのことを想う時、バングラの人たちが私にしてくれたように、私も彼らを愛したいなという気持ちでいっぱいでした。今、実際日本に帰ってきているわけですが、前よりは愛せてるんじゃないかなと自分では思っています。なんだか、彼らがいてくれるだけで感謝を感じるようになりました。日本での生活が前より幸せに感じています。

アルバートさんの問いかけを発端に、旅を通して「幸せ」について考えました。私なりの答えはこれ。「感謝のあるところに幸せはある。」バングラでの幸せや絶えることのなかった笑顔は感謝の心からきたのだと思います。日本での生活に足りなかったもの、そして私自身に足りなかったものを気づかせてくれたバングラの人たちに、そして同じ旅を共有した日本人の皆様に心から感謝いたします。これからもよろしくお願いします。

バングラディシュを再び訪れて

青山学院大学 3 年 水内 健太郎

今回 2 回目となるスタディーツアーに参加した。3 年振りにバングラディシュに行ってみて、2 週間という時間をメンバーと共に過ごし日本に帰って来てから感じた事、考えさせられた事が多くあった。まず今回のスタディーツアーで嬉しかった事は、自分の高校から生徒が 6 名も参加してくれた事である。前回僕は高校 3 年生の時に初めてスタディーツアーに参加して、帰ってきてから学年集会の時にバングラディシュについて発表何回か行ったが、こうした成果が着実に結果に表れている事が嬉しかった。アルバートさんや BDP のスタッフも 3 年振りに再会し、僕の事を覚えていた事が嬉しかった。

プーバイルのオフィスも 3 年前とは大きく変わっていた。各部屋にファンと蛇口付き洗面台が設備されて生活も前回と比較するとかなり快適になった。BDP スタッフの温かさもこういった所からも感じ取る事ができた。今回は B チームに所属し、ジャマルプール村に行った。ジャマルプールで過ごした一週間はあいにくの雨が続いた天候になってしまったが、多くの寺子屋やスタッフの実家等を訪問する事ができた。また今回は特別にボクシガンジの村にも半日訪れる事が出来た。訪問した先々で、いずれもバングラディシュの子供達や先生、スタッフの家族からおもてなしを受け、バングラディシュにほんのわずかしかない大学生と色々話を聴く事も負出来た。国籍や言語は一切関係なく人間同士が触れ合う事が出来た。また、今回はイスラム教の中でラマダンという断食に当たる時期に僕達はバングラディシュに行ったが、村の子供達は日中お腹が空いている中でさえ一緒にサッカーをしてくれて、村のスタッフも自分達は食べられないにもかかわらず毎回食事を作ってくれた。それはまるでラマダンとは少しも感じさせないようであったが、そこまで親切にして頂いた人の温かみを存分に感じ取る事ができた。バングラディシュで僕達に携さわってくれた彼らには本当に「感謝」の一言に尽きる。また、今回僕達 31 名というメンバーに出会いバングラディシュに行く事が出来た事も感謝である。今回出会った全ての人に感謝でいっぱいである。

「ドンノバッド！（ありがとう）」

これは私がダッカ空港に到着し、のりこさんとBDPスタッフに迎えられ、重いスーツケースをトラックに乗せてもらおうとスタッフに渡した時に使った、初めてのベンガル語だ。バングラデシュで過ごした2週間、私はこの言葉を何回使ったことだろうか。今思うと、本当に感謝の2週間だった。

高校生の時から開発途上国の教育に興味があり、大学に入ったら、どこでもいいからスタディツアーに参加しようと思っていた。たまたま大学にアルバートさんがいらっしやり、説明会が開かれたことがきっかけで私はこのスタディツアーに参加することとなった。当初の目的は、開発途上国に実際に行ってみることで、本やインターネットではわかりえないことを感じに行くことだった。

実際、バングラデシュに着いた当日から日本と違うところをたくさん発見した。空港周辺の道はきれいに整備されているが、少し田舎の方に行くとガタガタ。トレーニングセンターでは蛇口はあるが水は鉄のにおいがするし、お湯はでない。翌日バザールに行ってみるとゴミは道端に捨てられているし、裸足で歩いている人、そして物乞いの人が見えた。実際に開発途上国に行けた感動はあったが、既に写真で見たようなバングラデシュのように感じ、驚きやショックは思っていた程大きくはなかった。

「バングラデシュに自分が行くことに意味がある」そう感じさせたのは、バングラデシュの人々との数々の忘れられない出会いだろう。プーバイルでもジャマルプールでも、夜までスタッフと一緒にみんなで歌い、踊り、おいしいチャーを飲みながらいろいろな話をし、時にはビーチボールで遊んだり、ホテルを見に行ったり…。学校を訪問すると、いつ到着するかもわからないのに子どもたちが校舎の外で花道を作って待っていてくれた。たくさんの花と、時には貴重な紙に書いた絵を笑顔でくれる子どもたちと出会った。一緒に遊んでいる中で、おんぶをしたら子どもたちがすごく喜んでくれたのがとてもうれしかったのを覚えている。

たくさんの子供たちとの出会いの中で印象的だったのが、ジャマルプールでの最後の学校訪問だった。そこは道がぬかるんでいたため、学校のすぐそばまで車が来ることができず、数100mぬかるんだ道を歩かなければならなかった。私はこの歩みにくい道をゆっくり歩いていたのだが、気付くと横に、小さな青いワンピースを着た女の子と一緒に歩いていた。笑いかけたら、にっこりと返してくれ、その後、小さな手で私の腕をつかんだ。そのまま一緒に歩くと、道の真ん中に大きなぬかるみがあるのが見えてきた。すると、その女の子は私の腕をつかんだまま、道の端の方の歩きやすいところまで引っ張って行ってくれた。その後も、歩みにくいところで私を支えてくれた。そのやさしさがうれしくて、ぬかるみごとに私が「ドンノバッド」というと、その度にきれいな笑顔を返してくれた。

ツアー後半では、「日本に帰って何をすることが大切」ということばを何度か聞くうちに、帰国後自分は何をしようかと考えた。そして、まずは私のバングラデシュでの「出会い」を友達に伝えたいと思った。バングラデシュに行って一番良かったと私が思うのは、素敵な人たちと出会えたことである。私はバングラデシュで出会った人々と話すだけでなく、一緒に遊んだり、歌ったりと楽しい時間を共にした。彼らとの出会いは私にとって、社会問題や経済格差を直で感じるよりもずっと価値あることであり、これから先私の大きな支えとなるように思う。貧困や環境問題を直接肌で感じたことよりも、「ドンノバッド」という言葉と返ってくる笑顔、そしてこの2週間、感謝の気持ちでいっぱいになったことの方がずっと印象に残っている。それは、バングラデシュを研究対象として見る当初の目的とは異なるものである。しかし、バングラデシュで触れた人々のあたたかさは日本に帰ってきてからも心の中に残っていて、それは確実にツアーを私にとってより実りあるものとしてくれたと思う。だから帰国後は、友達にバングラデシュでの数々の素敵な出会いを話し、そしていつか、自分もまたあたたかい人たちとの再会と新しい出会いを願って、もう一度バングラデシュに行きたいと思う。

最後になってしまったが、バングラデシュで支えてくださったACEF・BDPのスタッフ、メンバーのみんな、出会った人々、子どもたち、そしてこのツアーに参加させてくれた家族に感謝したい。

ドンノバッド！ ジャパン ドンノバッド！ バングラデシュ

大切なもの

稲垣沙知子

日本に帰ってきて一番したい事は、ツアーに行かせてくれたお母さんお父さん機会を与えて下さった先生に感謝の気持ちを伝えることだった。それほどバングラデシュに行ってたくさんの忘れられない経験をした。中でも特に印象的なのは、ジャマルプールで毎日食事を作ってくださる方と「言葉は全く通じなくても心が通じあった」ことです。ジャマルプールを出発する朝、食事の調理小屋からその方に呼ばれたので行ってみると、側で食事を作るのを見せてくれ、味見までさせてもらった。その後、田んぼの回りまでお散歩に連れて行ってもらい、宿舎に戻ると今度は髪を結わいくれようとした。でも私はゴムがなかったのでその事を伝え、その方は一瞬悲しそうにしたが、なんと洗濯バサミを持ってきて髪をとめてくれた。高3の私が日本で大人に髪を結わいてもらって嬉しいかと聞かれたら疑問である。でもその時の私は、何とも言葉では表せない嬉しさで心がいっぱいになって涙が溢れてきた。そして、その方も涙を流しているのを見て、「心が通じ合ってる～」と感動してしまった。私が言えた言葉は「パニ」と「ドンノバット」だけなのに、こんなにも温かい気持ちになれるとはびっくり。同時に、日本でこんなふうに心から相手を思いやることをしていなかった事に気づき、人と関わることの大切さを身をもって感じた。

バングラデシュに行く前と帰国後では自分自身の中で何かが変わったと思う。高3になって、新しいことに目を向けることによって自分自身が変わるきっかけを作りたいと思ったのもツアーに参加希望をした一つの理由ですが、その答えのヒントも見つけられた。また、ツアーではバングラデシュについてだけでなく日本のことについても深く考え、どちらの国も大好きになって帰ってきた。これからは、バングラデシュのことを考えながら、見つけた自分の目標に向けて前進し、成長し、またバングラデシュに帰りたいと思う。

最後に、BDP スタッフさん、バングラデシュで出会った人達、一緒に行ったみんな、本当にありがとうございました！！

たくさん思い出がありすぎる！

共愛学園 1 年 清水菜央

スタディツアーの 2 週間はとっても早かったけどとても密度の濃い充実しすぎていた日々だった。

バングラデシュの時間の流れ方はゆっくりで、予定時刻より 30 分・1 時間遅れるのは普通の状況に初めは戸惑ったが、日本人は機械に時間を制されていてバングラの人には自然に時間を制されているというお話を聞きそこからは分単位・秒単位の日本の生活から開放されてとても居心地が良かった。

バングラデシュではたくさんの方との出会いがあった。

その中でも印象的なのは職業訓練校で出会った同い年の少年だ。そのクラスにいたのは 20 代前半くらいの方々ばかりだったのだが 1 人だけ年齢が低く同い年だったので、みかさんに通訳をしてもらいお話をした。彼は「父親に問題があって今仕事をしていないから、自分がここで学んで早く稼げるようになりたい」といっていた。同い年ということもあり「遊びたくはない？」と聞いたら「そういう気持ちはあるけど、この状態だからできない」と言っていて日本で親に迷惑をかけっぱなしなのに自分の要望は通そうとしている自分に気づき、恥ずかしく情けなくなった。

ジャマルプールのスタッフさんは皆さん親切で many many 萤を見に連れて行ってくれたり、船で歌やタイタニックごっこや exile や皆で砂丘で子供みたいにはしゃいだり、ほぼ毎晩歌とダンスで盛り上がりたりとラマダン中にも関わらず私たちを楽しませてくれて本当に感謝。BDP のスタッフさんは皆さん素敵な方で愛されるべき人達だなあと考えた。

シェアリングで教育についてお話をし初等教育の大切さを知れたし、もっともっと学べる人ができるように日本に帰っても協力して行こうと心に決めた。

バングラデシュの子供たちも日本の子供たちも無邪気な笑顔は同じで言葉は通じないけど関係なく交流ができ嬉しかった。

バングラデシュでの 2 週間はたくさんの方に支えられて送る事ができました。
皆さん本当にありがとうございました。

ps ♪

裏シェアいつまでも続けましょう

バングラデシュでの日々

持田 悠貴

まず、あの国に行った切っ掛けは、僕の恩師である山口旬先生による幼少からの、洗脳？刷り込み？による事も大きかったかもしれません。しかし、前々からあの国に…いえ、海外の国に憧れがあり、学生の間に行きたいなあと小学生の頃から思っていました。我ながら中々ませた小学生だったとも思っています。

さて、行く前に思っていたバングラの印象は、どんな悲惨な場所なのだろうか…などと今となっては大変失礼なことを考えていました。しかし、空港に降り立って土の匂いを嗅ぎ、現地の人と接して分かったんです。あれ…？ここ、日本よりも良い国かもしれない…と、

あっちの人達は最初外国人である我々を物珍しそうにジロジロと見てくるのが嫌だったのですが、それに慣れると逆に笑って手を振るのです。そうすると、（日本ではありえない）にこやかにスマイルを返して手を振りかえしてくれるのです。

あの国ほど人間同士がコミュニケーションを取り合って生活している所はそうそう無いでしょう。小学生程の子供から杖を突いて歩いているお年寄りまでが強い希望という名の光を目に湛えている国も少ないでしょう。そんな国に来てしまったのだと実感しました。

バングラデシュの最初の四日が過ぎ、Bグループはジャマルプールに行きました。ニキルさんが運転するバンに乗り、渋滞を縫って進むこと約十二時間ほどかかるところです。本来は4、5時間しか掛からない道のりのはずが先程の渋滞とトラックの横転事故、そして洪水による道路の被害などが重なってしまった為です。

ジャマルプールは度は付かない程度の大きな田舎町でした。田んぼが広がり、中くらいのマーケットがありました。そこに沢山の人が住んでいます。

ジャマルプールでの最初の学校訪問で行った学校は、そうですね…スーパーハウス二個分ないし一個半くらいの校舎で、敷地はテニスコートの片面ほどしかなく、田んぼの中にぽつんと有る光景はまるで陸の孤島の様でした。しかも壁は藁で出来ており、所々穴が開いている始末…そんな校舎に三つの教室があり、狭い教室に長机が四つ男女分かれてギューギューに座って勉強しています。信じられない光景でした。動画とか本などでの知識はあったものの、実際に見ると凄いものです。今の日本では当たり前のように自分の机があり、椅子に座って広い教室で勉強している我々はどれ程幸せなのかとも実感しました。生活の質はこんなにも違っているが、根本的な…いえ、人間的な所ではバングラデシュの人々の方が何倍も優れ勝っているのではないかと感じてしまいました。そう思いながらプーバイルに戻ってきて、残りの日にちを終えて帰ってきました。それ以外にも様々な経験や、実感、体験をしました。

驚きと発見、親切と優しさ、温かさで自然に満ち溢れた一時だったとおもいます。

さて、そろそろ筆を置かして頂こうと思います、本当はもっと書きたい事や思いがあるのですが、生憎今の自分には時間とスペースがないので…では！バングラデシュのスタッフの皆様、そして今まで私を見守っていて下さった方々、最後にその方達に会わせてくれた神様にドンノバット!!それでは皆様またどこかでお会いしましょう!!アリベデールチ!!

バングラデシュを振り返って

横須賀学院 坂本いずみ

「バングラデシュはね、人口が多くて、自然が豊かで、すごくいい国なんだよ」と習ったばかりの英語で瞳を輝かせながら少年は私に言いました。私はその言葉にはっとさせられました。なぜなら本当にその通りだったから・・・

私はバングラデシュに行く前、バングラデシュの人たちは大変な生活を送っていて、とてもかわいそうだな、と思っていました。しかし、実際にバングラデシュに行くと、日本では経験したことがないほどの笑顔に出会いました。それはBDPスタッフのものや、グループの友達のもの、学校や村で出会った子どものもの、ましてや道行く見知らぬ人に笑いかけられたその笑顔。そんな人たちの笑顔に出会う度に、私は人と関わるのがこんなに楽しいものなのだとすることに気付きました。

日本では時間に追われ、人との関わりを忙しいという理由で避けていました。でもバングラデシュの人々の、人と人とがしっかりと向き合い、思いあって生活している姿を見て、人と関わること、相手を思うことが生きてゆく上で一番基本的なことであり、一番大切なことだったのだと気付くことができました。

日本ではなかなかできない、人としてしっかりと向き合い、思いあうことを当たり前のようにできるバングラデシュの人のすごさを知り、そしてそのように人と接して生きるバングラデシュの人たちの姿がとても素敵に思えました。

バングラデシュに行って、こんなにバングラデシュが好きになるとは思いませんでした。どうしてこんなに好きになったのか、その理由を探していたときに、あの少年の言った、豊かな自然と溢れんばかりの人、そしてバングラデシュの人たち自身が持っている人間としての豊かさによって私はバングラデシュに魅せられたのです。

バングラデシュに実際に行かなければ、ずっとバングラデシュを誤解したままでしたきっと世界には知った気になって誤解したままのものがあると思います。実際に見てそして残りは自分で想像することの大切さを教えてくれたこのスタディツアーに感謝したいと思います。

本当にありがとうございました。

出合いに感謝

前田 恭子

バングラデシュへのスタディーツアーは2度目の参加でしたが、前回は10名と少ない人数で、季節も3月の雨が少ない、比較的過ごしやすい時期だったのが、今回は総勢31名、モンスーンの真っ只中と言う、行く前からかなりの覚悟が必要なものでした。参加者も、高校1年生から学校の教頭先生までと、多種多様且つ年齢層の幅が広く、かなり不安でした。でも実際には、夫々が自分の持ち味を生かしてチームに貢献し、自分なりの感性で多くを学び、スタディーツアー参加の意義を見つけて、今回のツアーを成功へと導いてくれました。

毎日の雨は、日本で言えばゲリラ豪雨のよう、東になって降ってくる。但し、雨の間は涼しくて、風邪をひくメンバーも続出。洗濯物は乾かず、悪路で立ち往生するトラックのせいで、地方への移動に12時間以上かかり、夕食は夜中。ここまで書くと若い女性の多いメンバーからのブーイングを想像しますが、事実はそうではなく、皆さん「これがバングラデシュの現実」と冷静に受け止めてくれました。日本では考えられないことの連続でも、その裏で、そういった状況の中で、私たちのために、出来るだけ快適に楽しく過ごさせたい、又、実りあるツアーにしてあげたいと、BDPのスタッフの方たちがいかに努力をして下さったか、メンバーは全員受け止め、感謝していました。皆の口から良く出てきた言葉「オシュビダナイ」(ベンガル語で、問題無い)、これを聞いても、現実を受け止め、自分の中できちんと処理が出来るのだと分かります。若い人の柔軟且つ素直な心、大人の知識や経験と包容力が発揮されて、夜のシェアリングはとても深く多くの学びがありました。

ACEF スタディーツアーの醍醐味は、もちろん一にバングラデシュの現状を見て体験し、BDP スクールの子どもたちや地域の人々と交流することですが、ツアーメンバーとしていつもは接点の無い人たちと出合い、多くのことを共有して、共に学びあうことにもあると思いました。自分を客観的に見つめなおしたり、一人で悩んでいることも、実は誰もが同じような経験があると気付く等、年齢に関係なく、人生の句読点のような経験が出来るのではないのでしょうか。

そういった、ある意味リフレッシュされた気持ちで経験したバングラデシュのツアーは、夫々の心にどのようなものを投げかけたのでしょうか。今後、皆さんと長いお付き合いをさせていただき、答えをみつけるのが楽しみです。

皆さん、楽しく中身の濃いツアーとなりました。本当にありがとうございました。

今回は6年ぶり、2度目のバングラデシュ訪問でした。この6年間で、変わったところ、変わっていないところをいろいろと見ることができました。まず変わったところ。新しいトレーニングセンターができたことは知っていましたが、プーバイルのオフィスがとってもきれいで快適なものに変わっていてビックリ！また、経済発展が目覚ましいと噂には聞いていましたが、その点ではいろいろな変化がありました。本当にたくさんの人たちが携帯電話を持つようになっていました。リキシャの運転手も携帯を持っていてリキシャの後ろには電話番号が書かれているものまでありました。私たちが訪問したネトロコナ地区には、以前はあまり見なかったトラクターがたくさんありました。以前は牛を使って田起こしをする光景を見ましたが、今回はそれを見ることはなく、トラクターが走っている姿をよく見ました。ネトロコナのオフィスのハبيبさんのお部屋には冷蔵庫が導入されていました。農村にも冷蔵庫がある時代になったんですね。

以前と変わらないもの。相変わらずおいしいカレーやフルーツ。ベンガル人の歌好き、踊り好き。何よりも、現地の方々のホスピタリティー、そして子どもたちの希望を持って学ぶ姿に心を打たれて帰ってきました。

私だけでなく、ツアーに参加した多くの人たちがそうだと思いますが、バングラデシュを訪れ、そこに生きる人たちと出会い、子どもたちと出会ったときに、彼らから何か力を与えられているような実感を持つのではないのでしょうか。慰められ、励まされ、癒されて、力を与えられている、そういう実感を持つのではないのでしょうか。そういう経験を通して、私たちにあって彼らが必要だということが分かります。そして、援助する、されるという関係から解放されて、共に生きる仲間として出会うことができるのだと思います。

3月に起こった東日本大震災の際に、バングラデシュの子どもたち、先生たちが、募金をしてくれたと聞きました。感動、感謝です。ネトロコナの学校訪問では、ヘモントさんが震災・津波のことを子どもたちに説明してくださり、井上儀子さんからベンガル語でお礼が伝えられ、私たちも「ドンノバット！」とすることができました。バングラデシュの人たちが、日本のことを気にかけてくれていることがとってもうれしいです。また彼らが、私たちのことを単なる援助者としてではなくて、共に生きる仲間として必要とし、大切に思ってくれているならとてもうれしいです。

私たちにあってバングラデシュの人たちは必要な存在ですし、彼らもまた私たちのことを必要だと思ってくれている。そんなお互いがお互いを必要としあっている関係を続けていければいいなと思っています。

私が今回の旅を通して一番印象深く感じたことは、バングラデシュの人々のたくましさや大らかさである。ネトロコナで出会った子どもたちにも第一に感じたのは「何と健康的でたくましい子どもたちなのだろう!!」ということだった。

そのような感想を持つことは「幼稚で視点が甘い!」とお叱りを受けそうだが、保健室に於いて30年間、極めてひ弱な子どもたちや豊かさの中で感謝の気持ちを見失いしあわせをしあわせと感じられない子どもたち、またコミュニケーション能力が養われていないがために人とうまく関われずに教室に行けない多くの子どもたちと接してきた私には、ことさらそのことが眩しく感じられてならなかった。

確かにバングラデシュは物質的には貧しい国である。BDPがそれまで学校がなかった町や村に創ったという学校の設備は、日本のそれとは比較できないほど粗末であり、照明もなく薄暗く、中には机・椅子すらもない教室もあった。低学年クラスではほとんどがノートの代わりに石版を使っており、爪の先ほどのチョークで一生懸命勉強している子がいた。オフィスに遊びに来る上級生の子どもたちには、何度もペンをくれとせがまれた。ぼろぼろのワンピースを着ている子もいた。裸の幼児達も多かった。どの村にも驚くほどたくさん子どもたちがおり、小さな弟や妹を抱いて面倒を見る子や、田や河に出て大人の手伝いをする子もあちらこちらで見かけた。彼らの背後には、私の想像を超える貧困や生活苦があるのかもしれない。

しかし、子どもたちはみな目をきらきらさせ、希望に満ちあふれ、「学校が楽しい!!」と声をそろえて言っていた。学校で勉強している子どもたちはみな真剣そのもので、クタツと机に伏せているような子は一人も見かけなかった。多くの子どもたちが裸足だが歩くことを嫌がらず、田んぼに落ちてしまってもケラケラ笑っていて、足が泥で汚れれば、ジャバジャバと池に入って洗っている。その足は幅広でたくましく、たぶん扁平足でバランスがとれずに悩む子などいないのだろうと感じた。

ある晴れた暑い日に学校訪問をしたとき、子どもたちを日向に座らせた状態で交流を図ることがあった。日本でこのようなことをしたら、たちまち熱中症で子どもたちがバタバタ倒れて救急車騒ぎになることだろう。だが、子どももそばにいた村人たちも全くへっちゃらで、倒れたのは日陰にいた私たちの方だった。

バングラでは裕福層以外にメタボはおらず、学校訪問へ行く際に乗せて頂いた力車の運転手さん達はみな、日本のスポーツ選手のように身が引き締まっていた。

船で河を上り学校訪問へ行ったときには、私はその風景ののどかさや美しさに感動し、溢れ出る涙を止めることが出来なかった。風景の中には自然と共に生きる人々や牛や鳥が居て美しく調和していた。「ああ、この平和と美しさがどうかいつまでも壊されませんように。」と優しく吹く風を心地よく受けとめながら心の中で何度も祈った。

帰国して初めて見たTVニュースでは、福島原発から200kmも離れた地点の砂場が放射能で汚染され、砂を入れ替えなければ子どもを遊ばせることが出来ないという報道がされていた。画面には不安そうに我が子を抱く母の姿があった。

私たちの国は物質的豊かさと引き替えに、今、目に見えない毒に侵されつつある。水も空気も食べ物も、安全かどうかと不安がらずにはいられない毎日だ。

それでも、物質的に恵まれた日本の生活は不自由なくやはり快適で、この居心地の良さを捨て去ることが出来ない。

プーバイルでの閉会式でBDPのボスであるアルバートさんが私たちに問いかけた。

「BDPはバングラに更に中高生が学べる学校を創りたい。日本であなた方が1週間、お菓子やスナックを食べるのを止めたらたぶん2ヶ月の教育を支えることが出来る。それは可能かどうか」と。しかし、ダッカ空港ですでに私たちはポテトチップスやアイスやジュースを我慢することが出来ず、帰国経由地の香港空港では、多くの仲間がスタバにマックに走り、力車2日分の賃金に匹敵するであろう飲み物を嬉しそうに手にしていた。ああ「物質的豊かさ=精神的豊かさではない」なんていう言葉は、物質的に豊かな国に生きる私たち日本人の上から目線の戯言なのかもしれない・・・・・・と思った。

人間は富を求めずにはいられない。たとえ富と引き替えに多くのことを喪うとしても、富への欲求を止めることは出来ないのだと改めて強く感じた。深く深く考えさせられた旅だった。

バングラタイムのなかで

鈴木羊子

足を泥だらけにしながら走り回って大きく笑う子どもたちがいた。先生の言葉に対して「ジー！」と大きな声で答える子どもたちがいた。水と緑があふれるバン格拉デシュの地で、陽気で活気のある人々とふれ合い、日本では決してできない経験をたくさんし、ここでもしか出会うことのできない美しい景色を見た。幸せは物質的な豊かさだけでは得られないと感じ、この地がいつまでもこのままであってほしいと思った。日本のように求めるだけ求めたあげく、踏み入れてはいけないところにまで手を伸ばしていることにも気付けない、なんてことにはなあってほしくないと思った。

でも、きっとそれは私のエゴで、ある程度の豊かさを得たからこそ言えることなのだろう。ドンノバットって言い合いながら協力して使う井戸が良いとか言いながら、日本に帰ったら水道を思いっきりひねって顔を洗った。便利だった。鉄っばい匂いもしなかった。それをバン格拉デシュの人が求めるのは間違っているのか？私たちは自分の目線だけでものごとを見てしまい、自分の価値観のなかだけで結論を出そうとしてしまう。

BDP スタッフのヘモントさんがネトロコナの BDP スクールの子どもたちに言っていた言葉が忘れられない。

「彼ら（私たち ACEF メンバー）の目はいくつですか？」—（生徒）「2つ！」

「彼らの耳はいくつですか？」—（生徒）「2つ！」

「みんな私たちと一緒にですね。」

すごく単純なことだった。堅苦しく、難しく考える必要はないのかもしれない。みんな同じ。誰かがものすごく金持ちで、誰かがものすごく貧しいなんてことはおかしいのだ。

今、バン格拉デシュの人々は大人も子どもも前を向いている。どこにたどり着くかはまだ誰にも分からないが、今までの国々とは違う新たな発展の道を開拓していったほしい。その道を開いていくのは、自分で書いたアルファベットを嬉しそうに見せてくれた子どもたちなのだろう。これからも彼らの笑顔が続くように、またそんなふうに見える子どもが1人でも増えるように祈る。そして微力ながら力になれたらと思う。

最後に、私たちは BDP スタッフや食事の用意をしてくださった方々、ドライバーさんなどたくさんの人の助けや心遣いによって素晴らしい2週間を得ることができた。私たちを支えてくれた人々に、ドンノバット。そして、私にたくさんの笑顔くれたバングラデシュの人々に、アバールデカホベ。ゆったりとしたバングラタイムが私に与えてくれたものをいつまでも心に置きながら日々を過ごしていきたい。

まだ帰国してから数日しか経っていないのに、バングラデシュの人々や自然、空気が懐かしく感じます。バングラデシュに着いた初日は何もかも日本と違い不安でした。しかし、町を走る日本車や、みんな携帯を持っていたり、無いと思っていた蛇口やシャワーがプーバイルのオフィスにあたりと、日本との共通点を見つけて喜び、バングラデシュをとて身近に感じました。マーケットでジャスティン・ビーバーの曲が“Baby, baby, baby”と流れてきた時には驚きました。

バングラデシュに着いた翌日のオリエンテーションでBDPの責任者のアルバートさんがおっしゃった言葉が印象に残っています。「バングラデシュより 52 倍の物質的豊かさを持つ日本は 52 倍幸せですか」という言葉です。幸せの尺度は皆違います。だけど、私が見たバングラデシュの人達はみんな常に笑顔できらきらしていて眩しかったです。そんな彼らを見ているだけで私まで幸せな気持ちになり元気をもらい、その笑顔の理由を知りたくなりました。

バングラデシュの人の暮らしの中で助け合うことは自然で、道路の溝に嵌ってしまった車を周りの人が押してあげたり、私たちが学校に行くときに道が川の増水で渡ることが出来なくなってしまい困っている時にボートを持ってきて引っ張ってくれました。そんな彼らは笑顔でした。職業訓練学校に行った時に会った少年も笑顔で、「僕の家は貧しいから僕は学校を卒業したらシンガポールに行って働くんだ」と、目をきらきらさせながら言っていました。貧しいけれど、みんなで助け合ったり、目標に向かって頑張っていることがこの笑顔が絶えない理由の一つだと思います。

ネトコロナでたくさん遊んだ子供たちは私の名前をすぐ覚えてくれてオフィスに遊びに来る度に名前を呼んでくれて心が暖かくなりました。言葉が分からなくても身振り手振りで分かち合うことが出来ます。また、無邪気にきらきとした笑顔で一緒に遊んでいた子供たちが学校では、「ジー（はい）、ジー（はい）」、と言って真剣に先生のお話に耳を傾けている様子や積極的に手を挙げて答える様子は今も印象深く残っています。

この国はこれからも発展していきます。日本では水、電気や道路などのインフラが整備されているのは当たり前でしたがバングラデシュに行くと初めてそのありがたみが分かりました。日本は発展し、便利になっていくうちに感謝の気持ちやいろいろなものを忘れかけていると思います。人と人との繋がりとかそういうバングラデシュの人々の温かさやきらきとした笑顔は失わないでほしいです。

この 2 週間、私はたくさんのことを学び、バングラデシュの人々の笑顔に助けられました。またこの黄金の地、バングラデシュへ訪れたいです。最後にバングラデシュでの 2 週間、私達を支えてくださったBDPスタッフ、ACEFのスタッフ、一緒に行ったメンバーやバングラデシュで出会ったみんな、本当にありがとうございました。ドンノバット。

私がこの ST に参加したいと思った動機のひとつは、少しでも広い視野で物事を見ることが出来るようになりたいという考えを持っていたことでした。世の中には様々な価値観がありますが、上も下も良いも悪いもないと思います。しかし、人はその世界について何かしら五感を刺激することなしにその世界を知り得ることはありません。そのようなことを考えているとなんだか不思議な気持ちになると同時に自分がちっぽけに感じ惨めな気持ちに襲われます。人は自分の生活がスタンダードなものであると考えがちですが、そのようなことは在り得ないはずです。私は出来るだけその世界の輪を広げて物事を様々な方面から見る事が出来るようになりたいと考えています。全てを知り得ることは不可能であるけれども、相手の考えていることや世界観を少しでも分かって、その世界を共有することが出来たらとても素敵だなと思います。気持ちを共有出来る相手がいることほど幸せなことではないだろうと思います。幸せも悲しみも共有出来た方が人生楽しいでしょ？私はそう考えています。

私はバングラデシュで生活する中で、アルバートさんからの問いかけの一つである“52 倍の幸せ”について深く考えることが出来ました。一つの見方で幸せを大きく二つに分けるとするならば、物質的幸せと精神的幸せが挙げられます。私はネトロコナでの生活を通して改めて精神的幸せの価値の大きさを考え直すことが出来ました。確かに、バングラデシュの子どもたちは、日本の子供たちのように沢山のおもちゃを持っているわけではありませんし、美味しいお菓子を沢山食べることが出来るわけではありません。しかし、私がネトロコナで出会った子どもたちの目はとてもキラキラと輝いていて、外国人である私たちにとても温かい笑顔に向けてくれました。そんな彼らと素敵な時間を共有出来たことは心温まる大切な思い出となりました。また、積極的に社会に参加して、子供大人関係なくお手伝いをする様子には心うたれました。そんな可愛らしい子どもたちの笑顔の裏側には、それぞれの家庭の生活や事情があるのかと思うと考えさせられてしまいます。このような子どもたちを笑顔にするものは何なのだろうか。そのことを私なりに考えて出した答えは、日本では忘れがちなでも忘れてはならない感謝の心。これに尽きると思います。人の温かさ、助け合いの精神、思いやることの大切さ、、、言葉にならないほどさまざまな感情を胸いっぱいを感じ「ドンノバット」と何度言ったか分かりません。

ST 中、私は日本の友だちや家族のことを思い出しました。普段は忘れていた感謝の気持ち。真っ先にこの気持ちを伝えなくてはと心から感じました。そのこと教えてくれた ST、BDP スタッフ、子供たち、出会った全ての人たちに感謝の気持ちでいっぱいです。私が出来る最大の恩返しは、この ST をこの夏の思い出としてしまうのではなく、今後も ACEF とバングラデシュとの関係を持ち、子供たちのキラキラした笑顔が絶えることがないように出来る限りの援助をしていくことだと思っています。

幸せを共有出来た仲間たち、ほんとうにありがとう。

「他人を知ることによって己を知る」という言葉があるように私はバングラデシュで二週間生活することで改めて日本での自分たちの生活がいかに無駄が多かったかまた日本の良さについても考えさせられました。

バングラデシュの人たちは時間に追われない生活をしていてゆったりな生活を送っています。バングラデシュの人は特にごはんが日本に比べ遅い時間にあると感じました。しかしそれは、日本であつたら家族や気の遣わなくていい友達にたいしてごはんを作る時はすぐできるものを作りがちですが、バングラデシュでは真逆のようです。ベンガル人は家族や友人のために費やす時間は人と人との絆を深め人生を豊かにするための時間ととらえているようです。バングラデシュのカレーはとても美味しく、地方や作る人が違うと味が異なり全然飽きませんでした。行く前は三食カレーなんて耐えられないと思っていました全然飽きず帰ってきた今となっては一刻も早くバングラデシュのカレーを食べたいといった状況です。日本でもバングラデシュのカレーを食べることのできるお店はあるとおもうけれど、バングラデシュの人が一生懸命私達のことを考えながら作ってくれたカレーは現地でしか味わえないし、旅してこそその経験であると思いました。

また他人を知ることとは他者を理解することであると私は思います。山旬が礼拝で「バングラデシュでお友達を作れるといいです」と言っていたが私は胸を張ってバングラデシュにて素敵な友達が出来たと言える。他者のことを理解できたときお友達になれたと言えるのであると思います。ネトロコナで遊びすぎて疲れていて寝ていた時に名前を覚えてくれた子が私の名前を呼び心配してお花を沢山くれた。また逆に少しいたずら好きの子がいてちょっかいを出したら大人におこられて帰れと言われ無理やり帰らされる子供がいて私は明日も来てくれるのだろうか心配になった。自分のことを心配してくれる友達がいる。また心配したいと思える友達がいるということはとても価値のあることであると思います。日本とバングラデシュでは物質的豊かさが違ったり精神的豊かさが違ったり、メリットやデメリット相違点は沢山ある。しかし素敵な友情を築ける環境があり出会いがあるといった点は日本とバングラデシュでは同じであると感じました。

高3という受験生でありながらもスタディーツアーに参加することで、自分の将来についても隣り合わせで考えることが出来た気がします。また自分の考えの甘さにも気づきました。バングラデシュは発展途上中であるから今後どのように発展していくのか楽しみであると同時に私の中でとても親しみのあり忘れられない国となりました。数年後またバングラデシュに訪れたいと思います。アバールデカホベ
バングラデシュで関わったすべての人にドンノバット

バングラデシュから帰ってきた今、一番感じることは「本当の幸せ」の意味を知り、自分と他の幸せについて考えさせられたということだ。

今回私がこのツアーに参加した一番の理由は、広い視野で世界を見てみたかったからである。私は今まで当たり前のように日本という国で生まれ生活してきた。海外にも行ったことがなかった私は、物が豊かにあふれ、ライフラインも便利で何不自由することのない日本が当たり前だと思っていた。しかし、ある時「発展途上国」という言葉を耳にし、興味を持った。「先進国」とも言われている日本との違いは一体何なのかを肌で感じてみたいと思ったのだ。そして、このツアーに参加することにしたのである。

そして、二週間のツアーの中で最も印象深かったものが、幸せについての話だった。ツアー参加者の私たちは、プーバイルの地で出会った、アルバートさんから、とても驚かされることを聞かされたのだ。それは…「日本人はバングラデシュに住む人たちよりも52倍の幸せな生活を営んでいる」ということだった。初めてこの話を聞いたとき私は正直どう反応してよいのか分からず戸惑った。確かに、物であふれ便利すぎる国で暮らす私たちは幸せなのかもしれないが、ではバングラデシュの人たちは普段幸せを感じていないのか？それに日本の幸せは52倍という数値で表せるのか？といういろいろなことを考えた。

二週間を終えた今、私なりに考えることがある。それは、幸せは値で示すものではなく、幸せには価値感があるということだ。二週間の間、たくさんの子供たちと関わったが、皆キラキラした目で話しかけてきてくれたし、毎日を楽しそうに過ごしているように見えた。また、一週間はプーバイルの施設を離れ、私たちC班は「ネトロコナ」へ移動した。そこでは、電気が十分に通っておらず、水も水道がないため、井戸を使った。そんな中でなら生活にも相当苦労しているに違いないと、行くまでは正直思っていた。しかし、実際に目で見てお互いに協力して光を灯し、井戸を汲み合う姿に私は心を打たれた。この風景を見るなかで私は「幸せに位はなく、幸せの価値は皆違う」と思ったのだ。

私は、日本で生まれ日本人として育ったわけで私なりの幸せの感じ方がある。バングラデシュの人だって同じで自分で持つ幸せがあるのである。だからやはり、どちらがどれだけ優れているとか劣っているということを比べるのは真の幸せではないのだと思った。また、もうひとつ気づいたことがある。それは、幸せには「物質的幸せと精神的幸せ」があるというものである。日本はやはり、物質的幸せで満足する人が多いと言える。ましてや、今現代の日本だからなおさらである。しかし、バングラデシュの人たちのように、人を通じて得ることのできる精神的幸せを忘れてはいけないのだと思う。私は、日本を物質的だけでなく精神的幸せであふれる国になってほしいと願った。

バングラデシュで二週間という時間を過ごした私はたくさんのことを吸収し、視野を大きく広げられたと思う。これから多くの人にこの情報を私たちから発信しようと思った。

第2の故郷、バングラデシュ

井上 栞里

私は、この2週間バングラデシュで充実した日々を送ることが出来ました。

時には笑い、時には泣いたりしていろいろなことがあったけれど、本当に楽しかったです。

このスタディーツアーで最も得たものは、バングラデシュの「豊かな心」です。私は、3日目で突然ホームシックになってしまいました。たくさんの人に励まされました。本当に嬉しかったです。特にアルバートさんの「ずっと友達だからね」という言葉にはうるうるしてしまいました。この時からアルバートさんとの友情が生まれました。アルバートさんとの友情は私にとって1番の思い出です。泣いてしまったときに慰めてくれたり、ギターでいろんな曲を演奏してくれたり、バングラデシュの名前を付けてくれたり、ベンガル語を教えてくれたり、一緒にお話をしたりなど・・・本当に家族のように優しく接してくれました。ネトロコナではたくさんの子供たちに出会いました。私はあまり子供たちと遊びませんでした。歌などでふれあうことが出来ました。さらに、名前も覚えてもらえたことも嬉しかったです。友情が深めたのではないかと思います。このようにいろんな人と出会うことが大切なんだと思いました。

私は、洗濯物を自分の手で洗ったり、井戸水を汲むのも初めて経験したのでバングラデシュの人達がすごく苦労しながら生活していることがとてもよく分かりました。井戸水を汲んだときはたくさんの方が必要で疲れてしまいそうになりました。1人ではとても時間がかかり大変でしたが、施設の方々が助けてくれました。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。私はこのことを通して「お互いに助け合いながら共に生活している」のだと思いました。

また、小学校訪問では「勉強が好き」という姿勢が伝わってきました。発言も授業態度も日本より立派でした。日本も見習うことがたくさんあるのではないのでしょうか。

最後になりますが、私はこの2週間本当に貴重な経験ばかりで将来のこと、自分の生き方についていろいろ見つめ直したり、考えたりすることが出来ました。アルバートさんが最後のミーティングで言っていた「いつもお互いに心を開き、必要とされるような人間」になっていきたいです。このツアーのお金を出してくれ、見守ってくれた家族、私を応援してくれた学校の先生や友達すべての人に感謝の気持ちでいっぱいです。本当にありがとうございました。これからの生活でバングラデシュでの経験を生かし、ACEFやBDPの活動にも積極的に協力して、1人でも多くの子供たちが学校に行けることができるように支援をしてあげたいと思います。

バングラデシュで過ごした時間はたったの2週間だったけど、私にとっての「初めて」がたくさんありました。

まず1つ目の初めてはバングラデシュに行ったことです。行く前にネットや本を見たのですが、治安が悪く衛生状態も良くないなどとかかれていてあまり良い国のイメージがしませんでした。でも実際は笑顔があふれていて陽気な人や優しい人ばかりでした。しかしゴミ問題は深刻で、地面にビニールや食品袋などが無造作に捨てられているのをよく目にしました。私はネトロコナで見た無数の蛍が忘れられません。だから今ある自然を守るためにもゴミの焼却について もっと国全体で考えるべきだと思いました。

2つ目の初めては手でご飯を食べたことです。最初は抵抗もあったけど馴れればどうってことはありませんでした。毎日食べたカレーも最初は飽きてしまうと思ったけどいろいろな具のバリエーションがあって全然飽きませんでした。後で知って驚いたのは、カレーに入っていたチキンは昨日まで庭にいた鶏だったということです。食べるためには誰かがさばかなければいけません。改めて私は身近にある命を食べて生きているのだなと実感しました。

そして3つ目の初めては井戸です。日本にいと蛇口をひねればすぐに水がでてくるから、当たり前すぎて水道のありがたさとかを分かっていなかったと思います。でもネトロコナには水道は無く井戸でした。バケツ1杯の水を汲むのは思った以上に大変で時間がかかりました。生活していくうちに水浴びも最 小限の水で済ませられるようになりました。日本に帰ってからも水について意識するようになり節水に取り組んでいます。

バングラデシュで出会ったたくさんの子供たちや大人の人とはもう一生会えないかもしれないけど、「元気にしているかな」「学校に通えているかな」などと気に掛けることでいつまでも繋がっていける気がします。青年海外協力隊のみかさんは、まずは自分の身の回りから行動してみようとおっしゃっていました。だから私はバングラデシュの実態や良さ自分の目で見てきたことを友達や家族に伝えていきます。またこれからの国を担っていく子供たちが1人でも 多く教育を受けられるように、安全な水を飲めるようになってほしいから、欲しいものとかをちょっと我慢して募金します。バングラデシュは日本が発展していくにつれて切り捨ててしまったことがたくさんあります。だからこれからみんなが海外旅行でいけるくらいのメジャーな国になってほしいです。そしたらまた絶対みんなに会いに行きます。

今までにないくらい最高の夏休みになりました！

バングラデシュで学んだこと

横須賀学院高校 1 年 ダントンみなみ

今回のスタディーツアーに参加して一番に学んだことは、“感謝する”ということです。

バングラデシュでの生活で、初めて現地でお会いしたBDPのスタッフの方たちが、すごく私たちのことを守ってくれました。私はどうして見ず知らずの人たちがこんなに親切にしてくれるのだろう？と思いました。

これまで私は、いつも家族や友だちに支えられていたのだろうけれど、それは自分の中で当たり前になっており、そのようなことを感じたことはありませんでした。けれども、バングラデシュで、いろいろな方たちが自分のことを守ってくれて…、例えば、どこに行く時もしっかり一緒に行ってくれたり、船に乗るときは必ず手を差し伸べてくれたり、雨が降ったらすぐに風邪ひかないか心配してくれたり…いろいろな場面で、気を配ってくれました。そのような中で2週間過ごしていくうちに、日本でもこれまでの16年間、きっと様々な形で、人に支えられたり、やさしくしてもらってきたのだろうと感じるようになりました。今までは、たくさんの人にやさしくしてもらったりした経験は特にないと思っていましたが、そうではなく、自分が、感謝する気持ちが少なく、いろいろしてもらったことや今の状態が当たり前だと思っていたからです。私が直接関わった人もそうでない人も 私は、いろいろな人に支えられていたのだと気づきました。なので、私はこれからたくさんの人に感謝しようと思いました。

例えば、電車に乗った時にお年寄りに席を譲ることも当たり前のことで、それを「譲ってあげている」という考え方ではなく、私も誰かに支えてもらっているのだから、私もできることをしようという謙虚な気持ちでできるといいなと思います。些細なことですが、そういうことから感謝の気持ちを表現できればと思います。

そして、もう一つ学んだことは、“幸せ”というのは人それぞれ違うということです。

日本とバングラデシュは経済格差が約50倍もあるということですが、果たして日本人はバングラデシュの人よりも幸せなのか？ということをも2週間考えて過ごしてきました。私は、日本とバングラデシュに経済格差があったとしても人々の幸せというのは、その人その人によって違うと思います。ある人は、勉強するのが幸せと感じるかもしれないし、食べることが幸せだと思う人もいます。幸せというのは、個人の考え次第で、経済的に豊かなことだけが幸せではないはずです。先進国が発展途上国ということは関係ないと思います。だから約50倍の格差なんかは人の幸せには関係なくて、人の幸せってというのは量れなくて比べられるものではないということを知りました。とともに、自分にとっての幸せというのを改めて考える機会となりました。そして自分はとても幸せだと感じる事ができ感謝の気持ち忘れないでいきたいと思っています。

今回お世話になったBDP、ACEFの皆さん、Cチームの皆さんそしてスタディーツアーに参加した皆さんお世話になりました。

たくさんの出会いに感謝

井上儀子

ACEF スタディツアーは今回第41回目。今までに4回中止があり、私は初期の3回は参加していないので、私にとって34回目のスタディツアーでありました。不思議なことに、毎回違う経験をするスタディツアーであり、毎回新しい発見があり、毎回感動を覚え、毎回最後には泣いてしまうのです。なぜか今回はひどく号泣してしまい、創始者のマラカール先生がスタディツアーメンバーを見送る最後の日に号泣していらした時のことを思い出しました。

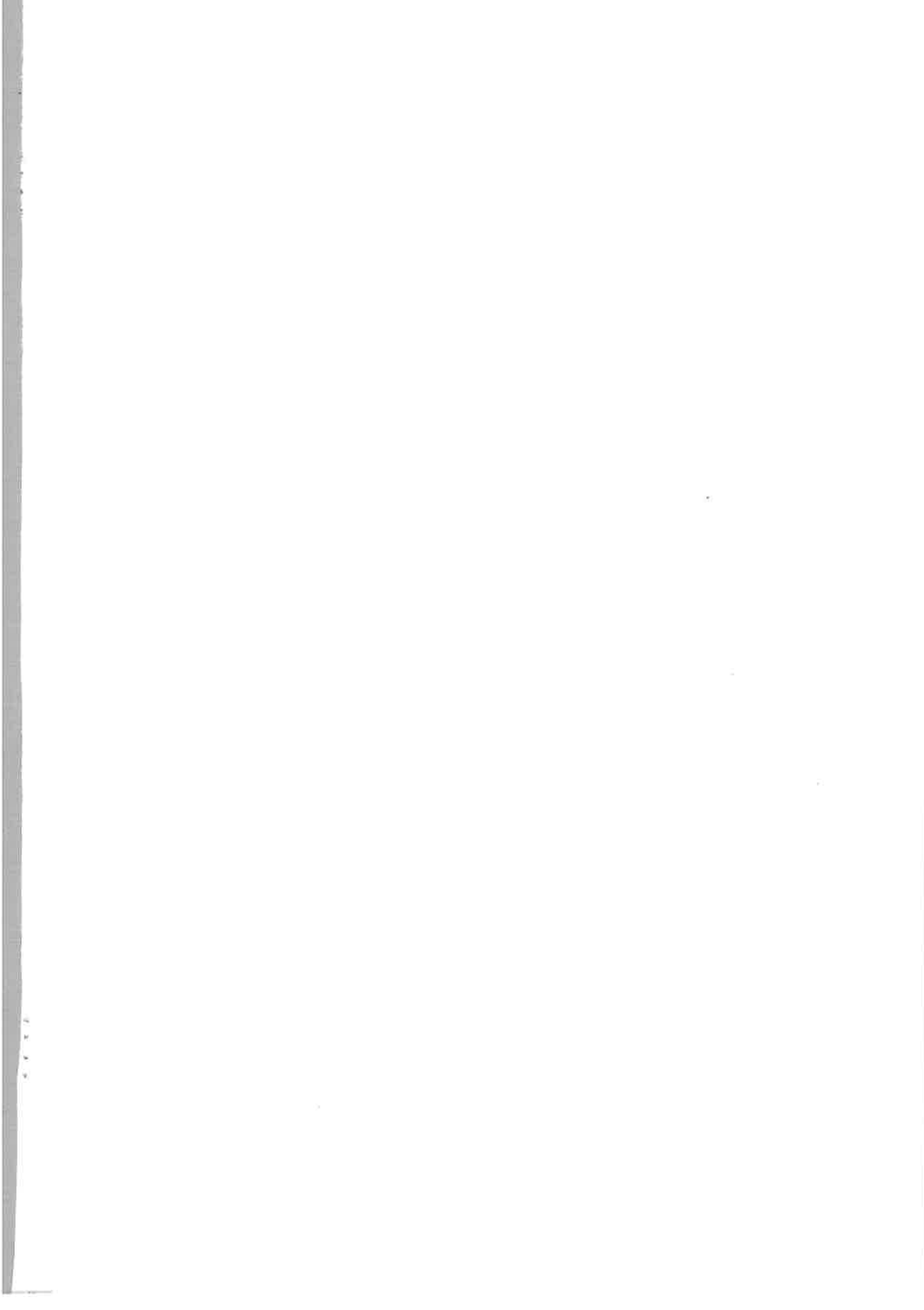
マラカール先生も隠退時には、様々な思い出が走馬灯のように巡り、感無量になられたのでしょうか。私もこの18年間、メンバーと友だちのようにふざけ合い、だんだん母親のように慕われ？ ついには祖母のように？ BDPスタッフは私のことをいつもお母さんのように思うと言ってくださいます。これはバングラデシュでは最高のほめ言葉！ でも私と大して年齢が変わらないようなおじさんが、私に「お母さん」とは…、ちょっと複雑な気持ち。でも最近では田舎に行くと、子どもたちから「おばあさん！」と呼ばれるようになってしまいました。これも愛情表現と受け止め、笑って抱きしめてはいるものの、ちょっと複雑。

初めて出会った子どもたちも、結婚してお母さん、お父さんになっています。ネトロコナBDPオフィスで私たちのために料理をしてくださったミナさんは13年前に私に会ったことがあると話してくれました。当時7歳で、BDPスタッフのファルークさんの実家でお手伝いさんをしていたそうです。そう言えば、かわいい女の子がお盆にコップをいっぱい載せて運んでくれたのを思い出しました。ミナさんもその時のことをよく覚えていると話してくれてびっくりでした。

道で出会った男の子が「Noriko!」と声をかけてくれると、本当に嬉しいです。なぜか名前を覚えてくれるのは男の子が多いのです。近所の子ばかりでなく、遠く離れた村からも、また日本人が来ていると聞いて顔を見に来してくれます。引っ越してしまったことを私が残念そうな顔をしたら、友達に聞いたと言って、数日後わざわざ会いに来てくれた子もいました。

たった10日～14日のスタディツアーで農村滞在は4～7日間、その中でわずか数分の出会いであっても、この18年間、お互いの心に残る出会い、心の動く出会いはたくさんありました。一人ひとりの顔が、次から次へと浮かびます。みんな困難な状況を抱えているにもかかわらず、あの笑顔を決やさない逞しさは、私にエネルギーを与えてくれます。

BDPに連なる12,000人の子どもたちを支えるためにと働きつつ、12,000人の子どもたちから、何と大きなエネルギーを与えられ続けてこられたのでしょうか。ACEFに出会い、BDPに出会い、たくさんの人との貴重な出会いに感謝の気持ちでいっぱいです。これからも感謝の気持ちを込めて、精一杯働き続けたいと願っています。





バングラデシュに寺子屋を贈ろう

教育はすべての協力の基です。会員としてご協力ください。

個人会員 年額1口 5,000円

団体会員 年額1口 50,000円

学生会員 年額1口 2,000円

一時寄付 随時 金額自由

郵便振替 00100-0-185540

特定非営利活動法人アジアキリスト教教育基金

〒169-0051 東京都新宿区西早稲田2-3-18-26

TEL. & FAX. 03-3208-1925

E-mail: acef@acef.or.jp

<http://www.acef.or.jp>